

埋藏文化財発掘調査報告書

笹山遺跡

1981

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は、合資会社関蔵組が笹山遺跡地の土採取計画の実施に伴い、関蔵組と長岡市が「埋蔵文化財笹山遺跡発掘調査事業委託契約」を締結して実施した緊急発掘調査の記録です。

この調査対象となった笹山遺跡は、長岡市親沢町字前田・字繩手に所在し、「笹」が多いところから地元では、「笹山」と呼んでいます。

この度の調査によって、県内では貴重な存在であるといわれる須恵器の「窯」が発見され、その「炭」や「焼土」についてもそれぞれ慎重に調査を進めました。

この記録が、地元文化の認識に、また学術研究のために活用され役立つことを願っています。

調査に当り、格別の御指導と御協力をいただいた諸先生方、及び地元関係者に対し、心からお礼を申し上げます。

昭和56年11月

長岡市教育委員会

教育長 横田 博

例 言

1. 本書は合資会社関蔵組（以下「関蔵組」という。）の「土採取計画」の実施に伴い昭和55年7月28日から同年8月25日にかけて実施した笹山遺跡の発掘調査記録である。
2. 調査は関蔵組から長岡市が委託を受け、長岡市教育委員会が実施した。発掘調査費は関蔵組の負担による。
3. 遺構の写真撮影、測量及び遺物の整理は寺崎裕助と安藤正美があたり、須恵器の復元は江尻清、江尻昭子が担当した。
4. 須恵器の実測、トレースは池上信子、石田庸子、伊藤富貴子、関志づ代、羽下尚子、福野洋子、寺崎裕助が行った。
5. 本報告書の須恵器の実測図中における回転ヘラ削り、ナデ等の表記は東京都府中市教育委員会発刊の報告書に従った。
6. 遺物の写真撮影及び図版等の作成は寺崎裕助と駒形敏朗が担当した。
7. 本書は分担執筆を行ったもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
8. 窯体内の考古地磁気の測定は富山大学広岡公夫教授、木炭の放射性炭素の測定は学習院大学木越邦彦教授に依頼し、報告をいただいた。
9. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成まで多くの方々や機関から御指導、御協力をいただきましたことをここに深く感謝いたします。

第 I 章	発掘調査の経緯	
	1. 発掘調査に至るまで	1
	2. 発掘調査の経過	1
第 II 章	遺 跡	
	1. 遺跡の環境	3
	2. グリットの設定	5
	3. 土 層	5
第 III 章	縄 文 時 代	
	1. 遺 構	8
	2. 遺 物	12
	(1) ピット出土遺物 (2) 包含層出土の土器 (3) 石 器	
第 IV 章	窯 跡	
	1. 位置及び立地	18
	2. 窯体各部の構造	18
	3. 灰 原	20
	4. 出 土 遺 物	20
第 V 章	年 代 測 定	
	1. 笹山窯の考古地磁気測定	29
	(1) 考古地磁気学 (2) 年代推定 (3) 試料採取と残留磁気測定	
	(4) 笹山窯の考古地磁気年代	
	2. 放射性炭素による年代測定	34
第 VI 章	考 察	
	1. 縄文時代の笹山について	35
	2. 窯跡について	37

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	4
第 2 図	グリット設定図	6
第 3 図	土層断面図	7
第 4 図	第 1 号ピット	8
第 5 図	遺構位置図	折り込み
第 6 図	第 2 号ピット	9
第 7 図	第 3 号ピット	9
第 8 図	第 4 号ピット	10
第 9 図	第 5 号ピット～第 10 号ピット	11
第 10 図	ピット出土縄文土器	12
第 11 図	グリット出土縄文土器	13
第 12 図	グリット出土縄文土器	15
第 13 図	グリット出土石器	17
第 14 図	窯 跡	19
第 15 図	窯跡出土須恵器	21
第 16 図	窯跡出土須恵器	22
第 17 図	窯跡出土須恵器	24
第 18 図	窯跡出土須恵器	26
第 19 図	窯跡出土須恵器	27
第 20 図	窯跡出土須恵器	28
第 21 図	考古地磁気測定結果	31

図 版 目 次

- 図版第1図 遺跡遠景，遺跡近景
- 図版第2図 調査風景
- 図版第3図 第4号ピット土層断面，第3号ピット土層断面
- 図版第4図 第4号ピット完掘状態，第1号ピット完掘状態
- 図版第5図 完掘状態（V～VII B～H），完掘状態（VIII～XI B～G）
- 図版第6図 グリット出土縄文土器
- 図版第7図 グリット出土縄文土器・石器
- 図版第8図 窯跡完掘状態，窯跡土層断面
- 図版第9図 窯体内須恵器出土状態
- 図版第10図 窯体内須恵器出土状態
- 図版第11図 窯跡出土須恵器
- 図版第12図 窯跡出土須恵器
- 図版第13図 窯跡出土須恵器
- 図版第14図 窯跡出土須恵器
- 図版第15図 考古地磁気試料採集風景

表 目 次

- 第1表 笹山窯の残留磁気測定の結果……………30
- 第2表 笹山窯の考古地磁気測定結果……………30

第 I 章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至るまで

本遺跡の発掘調査は「土採取計画」の実施に伴い行われたものである。

従来から本遺跡地の土採取権は長岡地域土地開発公社（以下「公社」という。）に属し、そのため試掘調査については公社の依頼により教育委員会が実施した。

その後、土採取権が関蔵組に譲渡されたため本発掘調査は、関蔵組と長岡市が委託契約を結び教育委員会が実施したものである。

以下は試掘調査及び本発掘調査に至る概要である。

- | | |
|-------------|---|
| 昭和54年 3月29日 | 公社と社会教育課で本遺跡の範囲の決定及び本遺跡発掘調査費用等の資料を得るため試掘調査を行うことで合意した。 |
| 4月 3日 | 文化財保護法第98条の2の規定による発掘調査（試掘分）の通知を文化庁長官に行った。 |
| 4月 4日 | 寺崎裕助（長岡市教育委員会社会教育課学芸員）を調査担当者として試掘調査を開始する。 |
| 4月 9日 | 試掘調査終了。 |
| 昭和55年 7月 1日 | 遺跡の範囲を決定し、その範囲を地形図上に記入する。 |
| 7月 7日 | 文化財保護法第98条の2の規定による発掘調査（本発掘分）の通知を文化庁長官に行った。 |
| 7月23日 | 関蔵組と笹山遺跡発掘事業における本発掘調査の委託契約を締結した。
(寺崎裕助) |

2. 発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は準備期間を含めて昭和55年 7月19日から 8月25日までの延べ26日間にわたって行われた。この間の天候は、旧盆以前は晴の日が多く、以後は雨の日が目立った。

以下は本遺跡の発掘調査日誌の抜粋である。

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 7月19日 | 発掘に先立ち、遺跡全体の草刈作業を開始する。 |
| 21日 | 午前中に発掘機材の搬入、午後に機材の整理、作業員の名簿確認を行う。 |
| 22日 | グリットの抗打ち作業を開始する。 |
| 24日 | 抗打ち作業が終了し、関蔵組と材木のかたづけ等の現場作業の打ち合わせを行う。 |
| 25日 | 草刈り作業が終了する。 |

- 28日 発掘に着手する。
- 8月2日 IX Cのグリットで窯跡が発見される。
IX Cのグリット付近では以前に須恵器片が表面採集されたことから窯跡の存在は試掘調査時にすでに予想された。しかし、試掘調査ではIX Cグリットの一部分にトレンチを設定したにもかかわらず確認できなかった。
- 5日 VI Gのグリットからピット1基検出、他の窯跡の存在確認のためIX D～G-1, a～eのトレンチを設定する。しかし、別の窯跡は発見されず、他には存在しないものと判断した。
- 7日 窯跡の発掘に着手、窯体内より焼土・炭・須恵器片が多量に出土した。
- 20日 窯跡部分を除外して発掘作業はほぼ終了し、後は小人数での残務整理を残すのみとなった。
- 21日 発掘地域のレベル読み、遺物の注記、水洗い、窯跡の発掘を行う。
- 22日 文化庁記念物課の阿部調査官、県文化行政課金子係長が来跡し、阿部調査官より窯跡出土の須恵器についての指導をうける。
- 24日 富山大学広岡公夫教授が考古地磁気測定サンプル採集のため学生3名を伴い来跡する。

(寺崎裕助)

発掘調査組織表

調査主体	長岡市教育委員会（教育長 横田博）
調査担当者	寺崎裕助（長岡市教育委員会社会教育課学芸員）
調査員	駒形敏朗（長岡市教育委員会社会教育課学芸員）
調査補助員	安藤正美
事務局	長岡市教育委員会社会教育課（課長 駒形一郎）

第 II 章 遺 跡

1. 遺跡の環境 (第 1 図)

笹山遺跡は長岡市と三島郡越路町との境界に近い長岡市親沢町に所在している。本地域は長岡市を南北に流れる信濃川の左岸に位置し、左岸一帯には来迎寺面、上富岡面、関原面、高寺面などの河岸段丘が^(註1)発達している。本遺跡はこのうち洪積世後期の^(註2)上富岡面上に立地している。そして、地形区では中部平野山地丘陵区の関原・越路台地^(註3)に属している。ちなみに信濃川右岸——東長岡地区には河岸段丘の発達が見られず、魚沼山地や栃尾・下田丘陵に属する東山丘陵が連なっている。

本遺跡周辺に眼を転じると南東側には東頸城郡松之山町方面に源を発する渋海川が新潟平野の南端部に顔を出し、沖積地を屈折しながら本流の信濃川に合流しているのが一望できる。また、信越国境の東頸城丘陵の支脈——八石丘陵を分水嶺として西の大積地区に接している。北は河岸段丘に沿って深沢・才津・関原方面へと続き、渋海川をはさんで南側には朝日原が開けている。本遺跡が所在する親沢地区は分水嶺の八石丘陵から渋海川に向って開折した沢に沿って発達した集落で、峠を越えて大積地区に通ずる道路が走っている。

このような環境にある笹山遺跡は現集落から約20mほど上の台地にあり、遺跡はさらに比高4mの差をもって北の上段と南の下段とに分かれている(第2図)。また、上段の西側には10m余の小さな丘がそびえ、南東側には小さな谷が入りこんでいた。第5図にみられる地山面で発見された埋没支溪はこの谷に通じているのであろうか。そして、本遺跡の東側の傾斜地には杉林が広がっている。

長岡市の西側——信濃川左岸の縄文遺跡については、かつて戸根与八郎氏が沖積地、越路から関原・三島町脇之町方面にいたる段丘、それに黒川沿岸の長岡市宮本・大積地区の三地域^(註4)に分け、遺跡の平面的・垂直分布について述べられたことがある。これに長岡市の東部——信濃川右岸地域を加えて平面的分布を見てみよう。右岸地域には前期が金倉の1ヵ所、中期が10、中・後期の複合は8ヵ所、後期が4、後・晩期の複合が2、晩期が1ヵ所の26ヵ所の遺跡がある。この地域の遺跡は左岸と異なり、河岸段丘が発達していないこともあり、猿倉岳、鋸山などの通称東山丘陵の西辺に位置するものが多く、沖積地に存在するものは発見されていない。また、小林達雄氏の遺跡のセトルメント^(註5)で遺跡を見ると、パターンBと思われる中期の山下遺跡をはじめ、B・Cタイプの遺跡が多く、パターンAの遺跡は存在していないのではないかと考えられる。それに引きかえ、笹山遺跡が所在する左岸の河岸段丘にはパターンAクラスの馬高・三十稲場(中・後期)、藤橋(晩期)、それに岩野原(中・後期)があり、それらの周辺には本遺跡をはじめ転堂、南原などのパターンB・Cと思われる遺跡が

存在している。このような右岸と左岸の遺跡の在り方の違いは地形的なところからくるのであろうか。

さて、次に今次調査で発見された須恵器窯跡の歴史的環境をみてみよう。長岡市周辺には本例も含め6カ所の窯跡が発見されているにすぎない。その分布は、信濃川左岸——西長岡地区に4カ所、右岸の東長岡地区に2カ所である。このうち発掘調査が実施されたのは本遺跡と東長岡にある間野窯跡の2カ所3基である。これらの窯跡の立地は東長岡の間野や岩村窯跡が東山丘陵から沖積地にかけて開折された沢の中に位置し、いずれも沖積地に臨んでいる。しかし、対象的に本遺跡や岩野原・羽黒・蒲堤窯跡の西長岡地区では河岸段丘と後背地の丘陵との接点に位置しており、沢の中にある東長岡の例とは立地の条件が異っている。ところで、これらの窯跡で生産された須恵器の供給先はとなると、不明な点が多く、生産地と消費地との関係は今後に残された問題となろう。(駒形敏朗)

註1. 新潟平野団体研究グループ「新潟県小千谷市周辺の第四系——新潟県の第四系・そのXVI——」新潟大学教育学部高田分校研究紀要第17号 1972年

註2. 新潟第四紀研究グループ「地形分類図よりみた新潟県の地形区——新潟県の第四系・そのXIV——」新潟大学教育学部高田分校研究紀要第16号 1971年

註3. 註2と同じ

註4. 戸根与八郎他「埋蔵文化財発掘調査報告書——片田遺跡——」新潟県埋蔵文化財調査報告書第9 新潟県教育委員会 1977年

註5. 小林達雄「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて——」月刊文化財昭和48年1月号 1973年

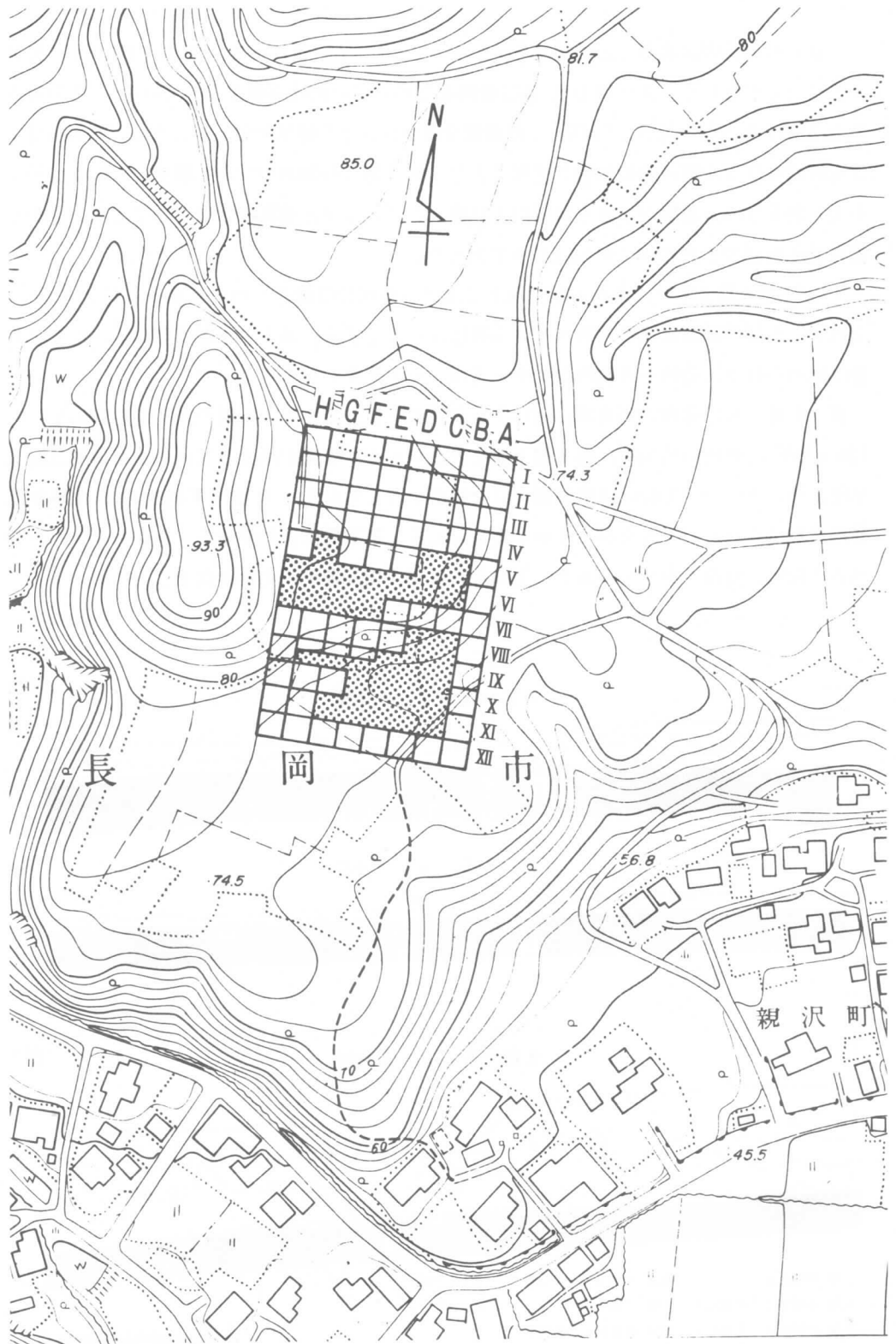
2. グリットの設定(第2図)

本遺跡の今回の調査は土採取予定地を対象としたため、遺跡のほぼ北側に限られた部分の発掘であった。発掘グリットは遺跡の北東部に任意の原点を置き、原点から南をX軸、西をY軸として設定した。グリットの区画は10m×10mを大グリットとし、大グリットをさらに2m×2mの区画に分け小グリットとした。名称は大グリットのX軸をI, II……XIIIのようにローマ数字で、Y軸をA, B……Hのようにアルファベットを用いて表わし、小グリットはX軸を1, 2……5, Y軸をa, b……eとし、VII B-1, aなどと呼称した。

(寺崎裕助)

3. 土層(第3図)

本遺跡における基本層序は第1層—黒褐色土(表土)・第II層—赤褐色土+黒褐色土(遺物包含層)・第IV層—赤褐色土+暗赤褐色土(地山漸移層)・第V層—赤褐色土(地山層)からなっており、第III層—黒褐色+赤褐色土・第VI層—黒褐色土+暗褐色土・第VII層—黄褐色土+黒褐色土は谷埋め土である。



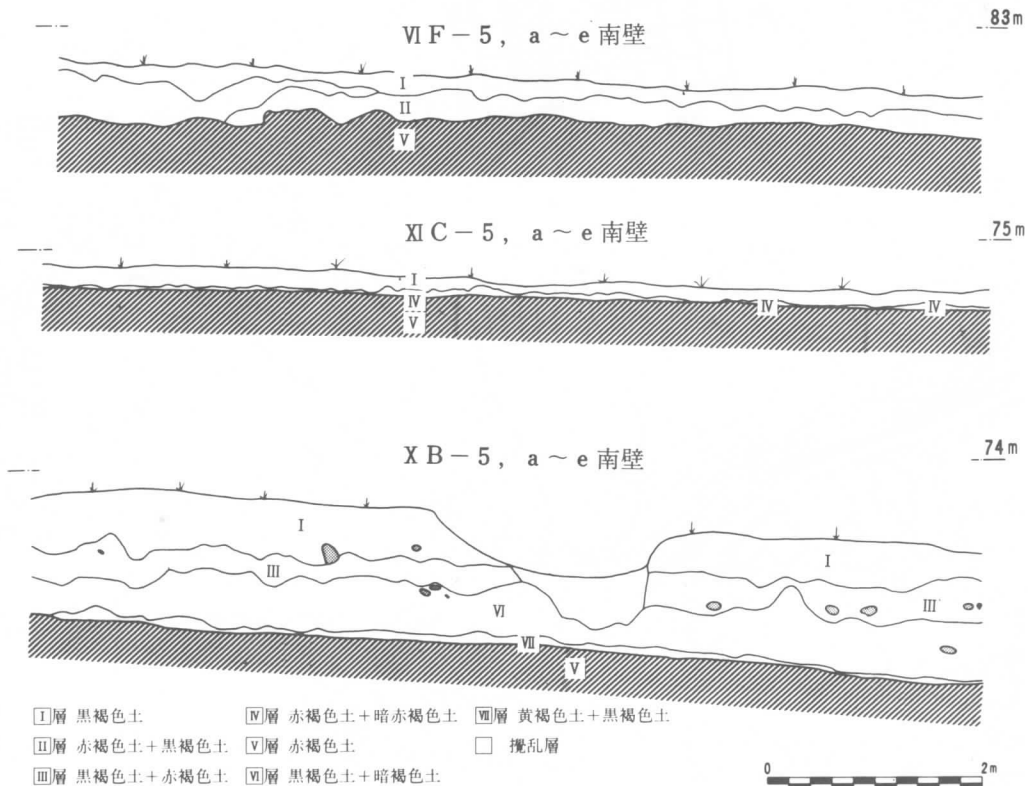
第2図 グリッド設定図 (1:2500)

土層の堆積状況は地点ごとに相違を示しているが、V～VII B～H、XI B～F、IX・XB～Eに三大別される。V～VII B～Hは遺跡北側の台地の南縁辺部を占めている。この地点の地山層は西→東へ向かって傾斜し、西側部分は耕作による攪乱が著しかったが、東側部分では比較的良好な土層の堆積状態が把握できた。第II層は約20cmの厚さで堆積しており、若干の炭化物を含み、遺物が十数点同層中より出土しているゆえ遺物包含層と認定した。しかし第II層を確認できたのはこの地点のみであった。

V～VII B～Hより一段下がった台地上で遺跡の南側に位置を占めるXI B～F付近では、一般的に土層の堆積は薄く約20cmで地山層に達してしまう。第I・IV層は確認できたが第II層は確められず、遺物も遺構内をのぞいてほとんど出土しなかった。

IX・XB～Eは遺跡の南東部に開口する沢筋に位置している。土層の堆積は約100cm～約120cmと厚く、遺物は第III層、第VI層上面などからかなりの量が出土している。第III層は暗く、粘性が強いという点を除けば第II層と似た特徴を有しており、XI B～F付近の第II層が沢筋に流れ込んだものではなかろうかと考えられる。第VI層は粘性が強く、色調も黒いなど谷埋め土独特の特徴を有しているが、上面からは縄文中期前半の土器が出土している。

(寺崎裕助)



第3図 土層断面図

第 III 章 縄 文 時 代

1. 遺 構

本遺跡からは10基のピットと1ヵ所の焼土が検出されている。10基のピットのうち6基の覆土中からは縄文土器片が出土しているゆえにこれらのピットは縄文時代の所産としての可能性が考えられる。しかし、他の4基のピットからは時代を決定づける遺物は出土しておらず、所属時代は不明であるが、今回は第II章で一括して説明を行った。

a. 第1号ピット (図版第4図下 第4・5図)

位 置：VI G-2・3, aに位置し、他のピットが確認された段丘よりも一段高い北側の段丘上に所在する。

プラン：開口部平面形態、基底部平面形態とも楕円形を呈する。

規 模：開口部長径

約210cm・短

径約185cm,

基底部長径約

185cm・短径

約160cm, 確

認面からの深

さ約40cmを測

る。

覆 土：ピット内全

体に暗褐色土

+赤褐色土が

堆積していた。

遺 物：若干の縄文

土器片が出土

している。

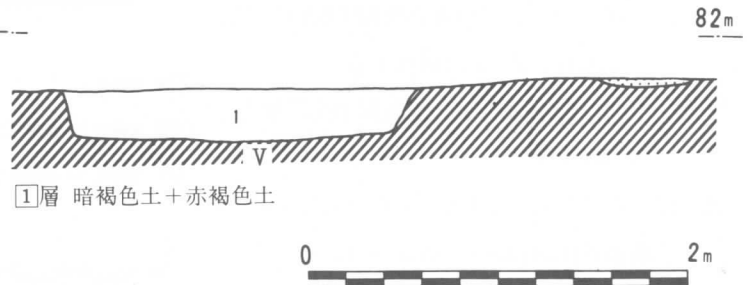
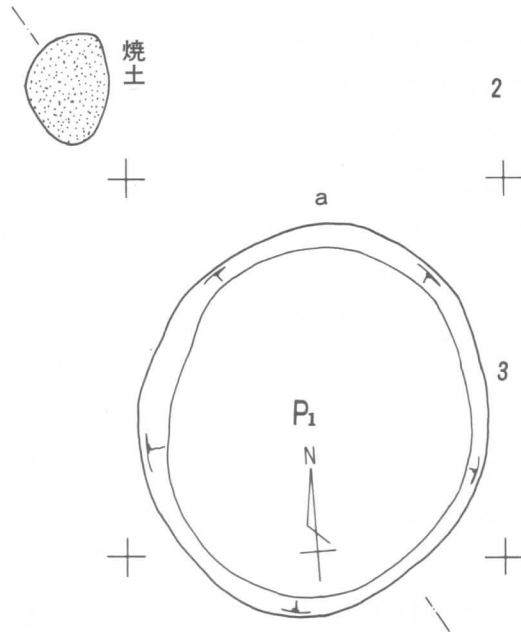
その他：本ピットの

北側約120cm

のところ約

45cm×約60cm

の範囲で焼土



第4図 第1号ピット

が確認された。

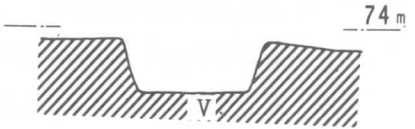
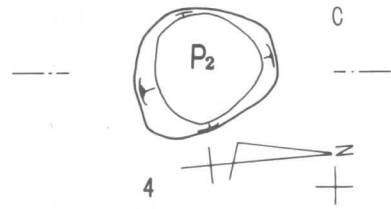
b. 第2号ピット (第5・6図)

位置: XD-4, Cに有り, 周囲に第3・4号ピットが所在する。

プラン: 開口部平面形態は楕円形, 基底部平面形態は円形を呈する。

規模: 開口部長径約75cm・短径約65cm, 基底部直径約50cm, 確認面からの深さ約30cmを測る。

遺物: 出土遺物は認められなかった。



C. 第3号ピット (図版第3図下 第5・7図)

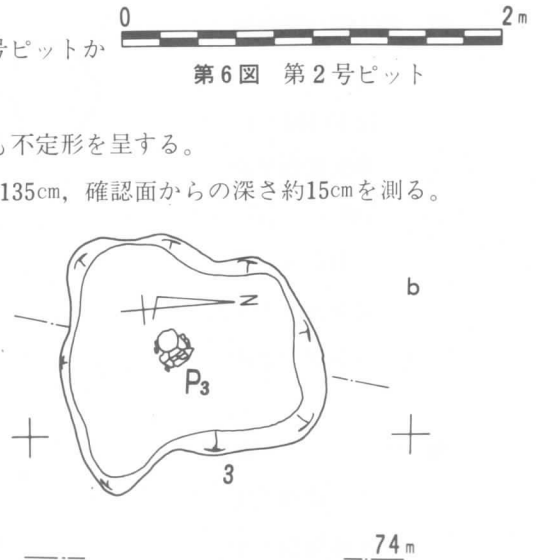
位置: XD-3, a・bに位置し, 第2・4号ピットからほぼ等距離に所在する。

プラン: 開口部平面形態及び基底部平面形態とも不定形を呈する。

規模: 開口部最大幅約155cm, 基底部最大幅約135cm, 確認面からの深さ約15cmを測る。

覆土: 一部に木の根の攪乱が認められるが全体としては4層からなっている。第1・4層は暗褐色土を第2・3層は黄褐色土を基調としている。

遺物: ピットのほぼ中央部の第1層上面より縄文の施された胴部下半から底部にかけての土器片が出土している。



d. 第4号ピット (図版第3図上 図版第4図上 第5・8図)

位置: 第3号ピットの東に隣接するXC-2, e, XD-2, aに所在する。

プラン: 開口部平面形態, 基底部平面形態とも楕円形を呈する。

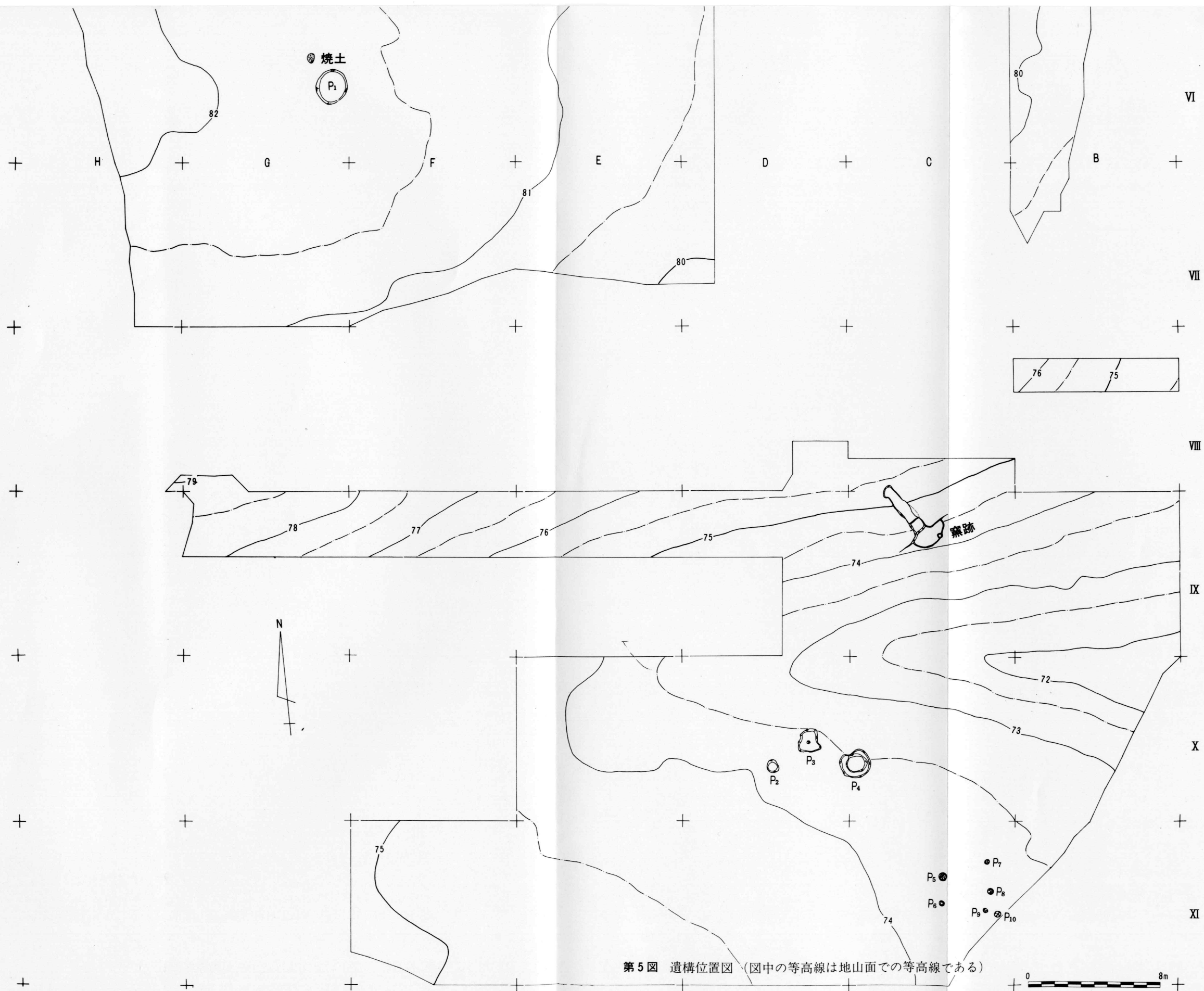
規模: 開口部長径約190cm・短径約150cm, 基底部長径約130cm・短径約110cm, 確認面からの深さ約50cmを測る。



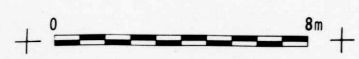
- ①層 暗褐色土
- ②層 黄褐色土+暗褐色土
- ③層 黄褐色土+赤褐色土
- ④層 暗褐色土+黄褐色土
- 攪乱



第7図 第3号ピット



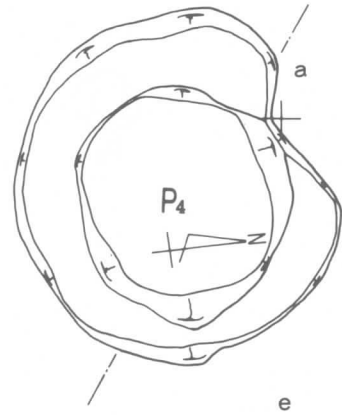
第5図 遺構位置図 (図中の等高線は地山面での等高線である)



覆 土：黄褐色土を基調とした第1・2層が堆積している。第2層には灰黒色粘土が小ブロック状に多く混在していることから急激なる堆積がなされたものと推測される。なお、ピットのほぼ中央部の第2層上面には直径約30cm、厚さ約10cmの範囲で焼土の散布が認められた。

遺 物：第2層下部より縄文土器の小片が数点出土したのみである。なお、縄文土器は小破片のため時期等の判別は不明である。

その他：確認面より深さ約20cm余りの箇所には幅約10cm～約30cmのテラスが巡っており、そのテラス直上には第1層が認められた。



4 + 3
74 m

e. 第5号ピット～第10号ピット（第5・9図）
位置：発掘区南端のXIC-2・3、a～cに所在する。

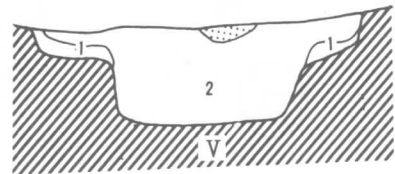
プラン：開口部・基底部とも円形を呈するものが多い。しかし、第5・8号ピットは複雑に切り合っている。

規模：開口部直径の平均約30cm～約40cm、基底部直径の平均約10cm～約20cm、確認面からの深さの平均約30cm～約40cmを測る。

覆 土：全てのピットに黒褐色土が堆積していた。

遺 物：第5・6・8号ピットより縄文土器片が出土している。しかし第8号ピットのそれ（第10図3～5）を除いてはいずれも小破片で時期等の詳細は不明である。

その他：これらのピットは第1号～第4号までのピットと比較してせまい範囲に群在し、規模が小さいなどの相違点がうかがえ、柱穴ではなかったかとの推測もなされよう。



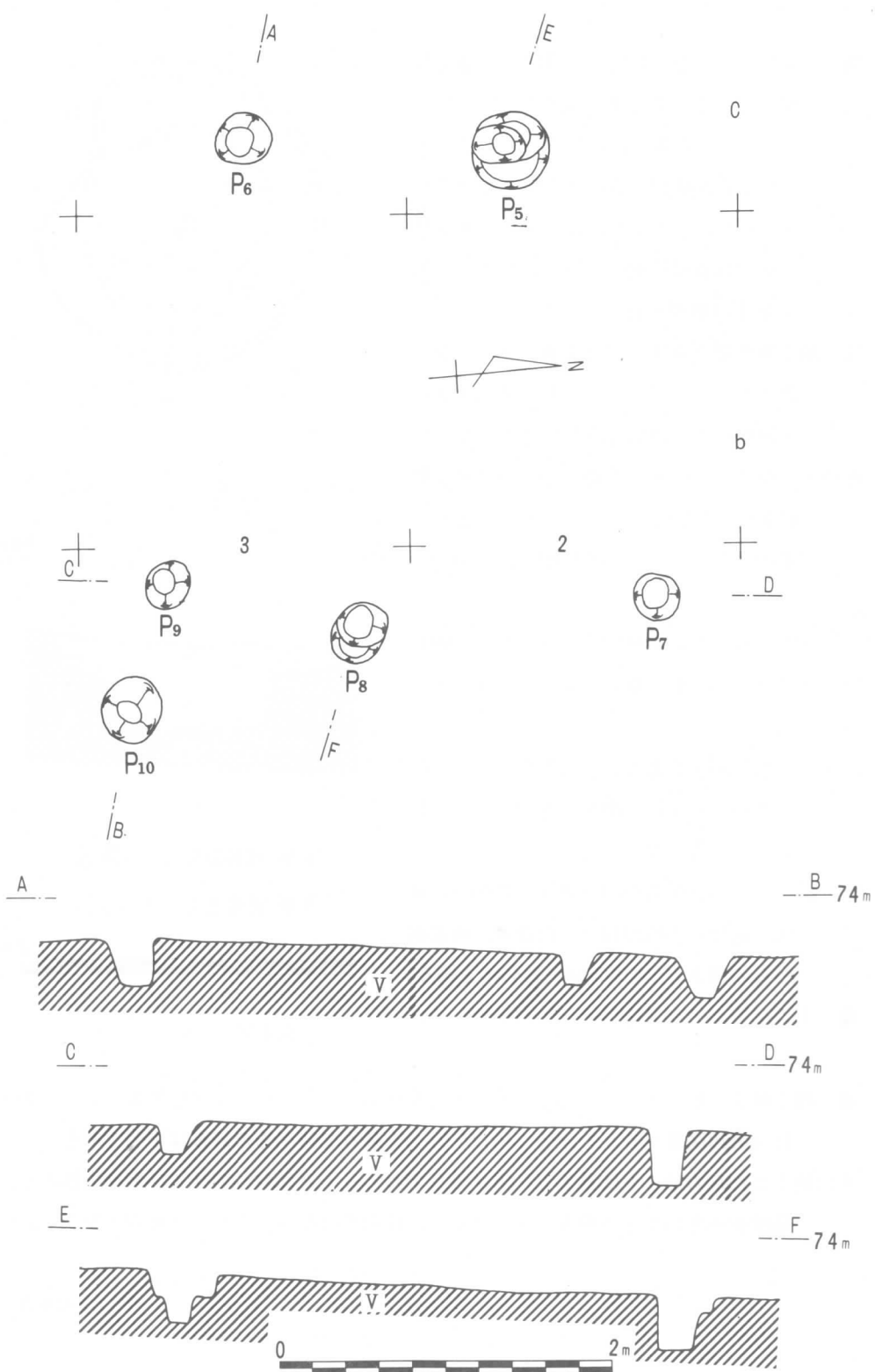
①層 黄褐色土 焼土

②層 黄褐色土+灰黒色粘土

0 2 m

第8図 第4号ピット

（寺崎裕助）



第9図 第5号ピット～第10号ピット

2. 遺物

本遺跡出土の縄文時代の遺物は中期前葉の土器が平箱で3箱、石器が14点である。このうちピットからの出土遺物は土器片ばかり20点と少ない。他は包含層からの出土である。

(1) ピット出土遺物 (第10図)

ピット出土のうち拓影がとれるのは図示した5点にすぎず、他はマッチ箱以下の大きさであったり、縄文が施されただけのものであった。なお、土器分類の基準は包含層出土土器の項でふれることにする。

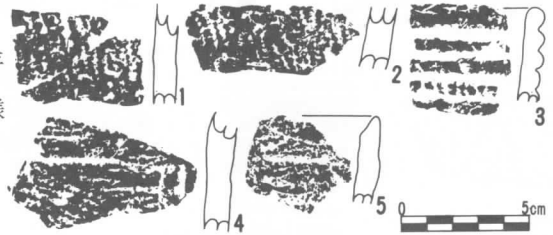
○P₃出土土器 (第10図1・2) いずれも斜縄文が施された胴部破片である。

○P₈出土土器 (第10図3～5) P₈から図示した3点が出土しただけである。

第1類A (3) カマボコ状の平行沈線文の束が口縁と平行にめぐり、中ほどには爪形文「C」が押し引きされている。

第3類 (4) 地文の縄文の上に平行沈線文で文様を描いている。断面や文様の観察から頸部破片と思われる。

第14類 (5) 口縁が内そぎ状になっている縄文施文の土器片である。



第10図 ピット出土縄文土器(1・2はP₃, 3～5はP₈)

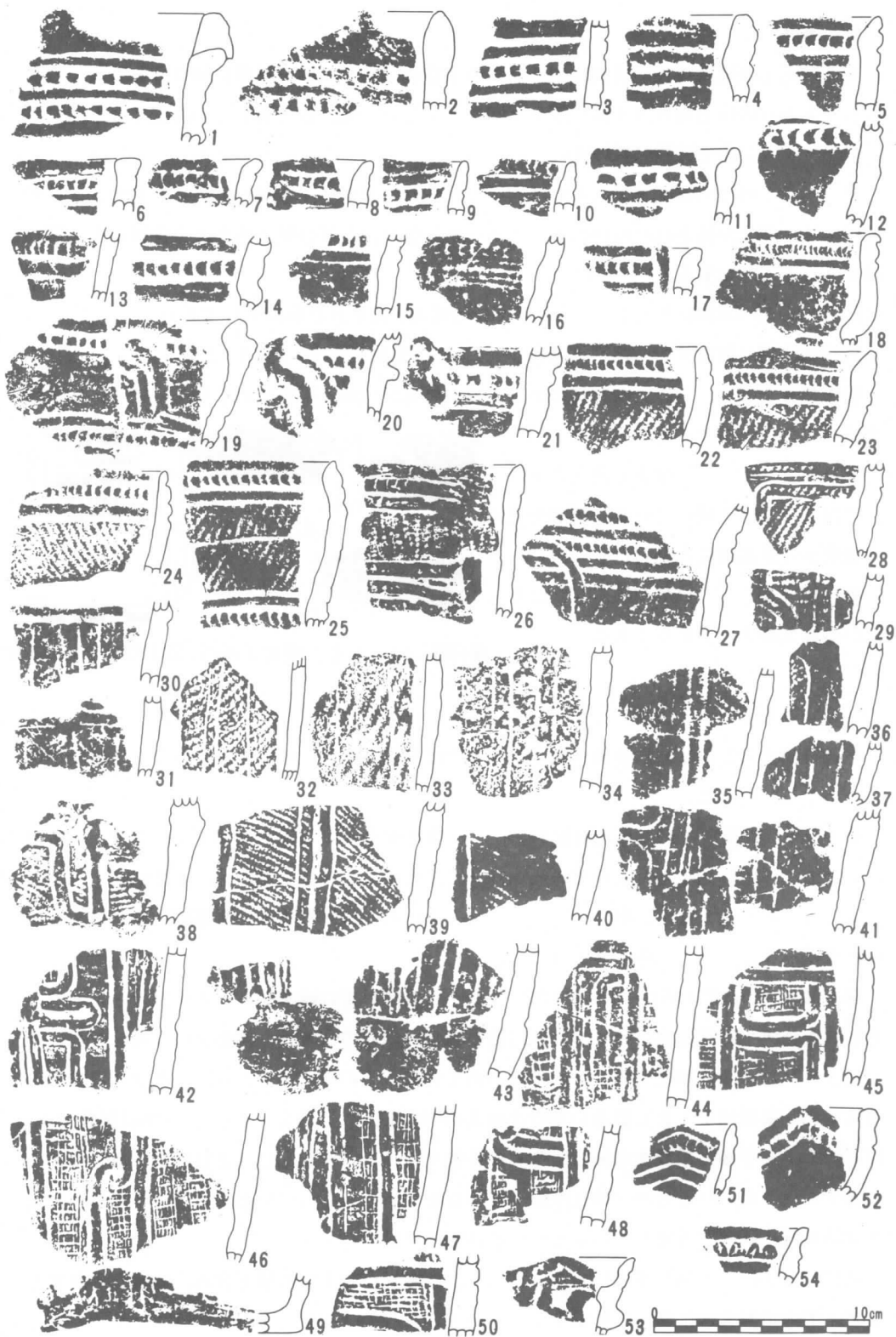
(2) 包含層出土の土器

本遺跡出土の土器は器形全体を知り得るものは1点もなく、土器分類にあたっては文様構成を主として行った。

第1類 (図版第6図1～41 第11図1～53) 深鉢形を呈する爪形文のグループで、本遺跡において主体的に出土したものである。地文や平行線文の種類などから、より細かく分類されようが、資料が少なく、破片ばかりということから、口頸部破片、胴部破片それに波状口縁のグループに分けて説明することにした。

第1類A (図版第6図1～19 第11図1～26) 口縁が平口縁を呈するものがほとんどで、爪形文を施す平行沈線文はカマボコ状に盛りあがったものが多い。爪形文は口縁と平行に押し引きされた所謂爪形文「C」が大半を占めている。この爪形文の土器には数条の爪形文があるもの(第11図1・2)、数条の平行沈線文の中の1条に爪形文があるもの(第11図3・4)、口頸部の上・下縁に爪形文を施してその中を無文のままにするもの(第11図18～21)や地文に縄文が施されているもの(第11図22～26)などがある。さらに口頸部の上・下縁の爪形文を半隆起線や隆線で連結しているもの(第11図19～21)がある。

第11図16は細い工具で多段にわたって爪形文を施し、胎土に雲母を含み、赤褐色を呈するなど、他の爪形文とは異った要素を持っている。



第11図 グリット出土縄文土器

第1類B（図版第6図20～38 第11図27～50） 直接的に爪形文がみられるのは第11図27・50の2点だけであるが、他のいずれも口頸部に爪形文をもつ千石原第1群-1 a～g^(註1)の胴部にみられる文様であるところから第1類の仲間とした。おそらく、第1類Aの胴部破片かと思われる。爪形文の胴部文様の地文には縄文（第11図28～40）と無文（第11図41～50）がある。縄文地文のものは平行沈線文が横走する部位は頸部だけに限られているようであり、胴部には垂線として表出されている。それに比して無文地のものは胴部全体に平行沈線文を縦横に引いてモチーフを描いている。さらに44～50はモチーフの無文地に格子目文を充填している。なお、この第1類Bに施されている平行沈線文は第11図27～37を除いてはカマボコ状に断面が盛りあがっている。

第1類C（図版第6図39～41 第11図51～53） 第1類Aは第11図1・2・23を除いて平口縁であるのに対し、第1類Cは波状となっている。第11図51・52はAと同じ爪形文「C」を口縁と平行に施しているが、53は粘土紐を上方に「コ」字状に貼りつけ、その中に細かい爪形文を4段にわたって施している。

第2類（図版第6図42 第11図54） 蓮華文の土器は本遺跡出土土器中この1点しかない。連鎖状の爪形文で、上縁だけに縁どりをして蓮華文をつくり出している。

第3類（図版第6図43～48 第12図1～6） 口縁と平行に断面がカマボコ状の平行沈線文の束が施されているグループである。第12図1は口縁に刻目が入った瘤状の粘土が貼りつけられている。2は片口状に口縁を押し開き、そこに粘土紐を弧状に、さらに右側にも粘土紐を縦に貼りつけている。

第4類（図版第6図49 第12図7） 微隆起線文でモチーフを描き、空白部にカマボコ状の平行沈線文とクサビ状の刻目文をうめている。胎土に石英粒などが多く混入している。

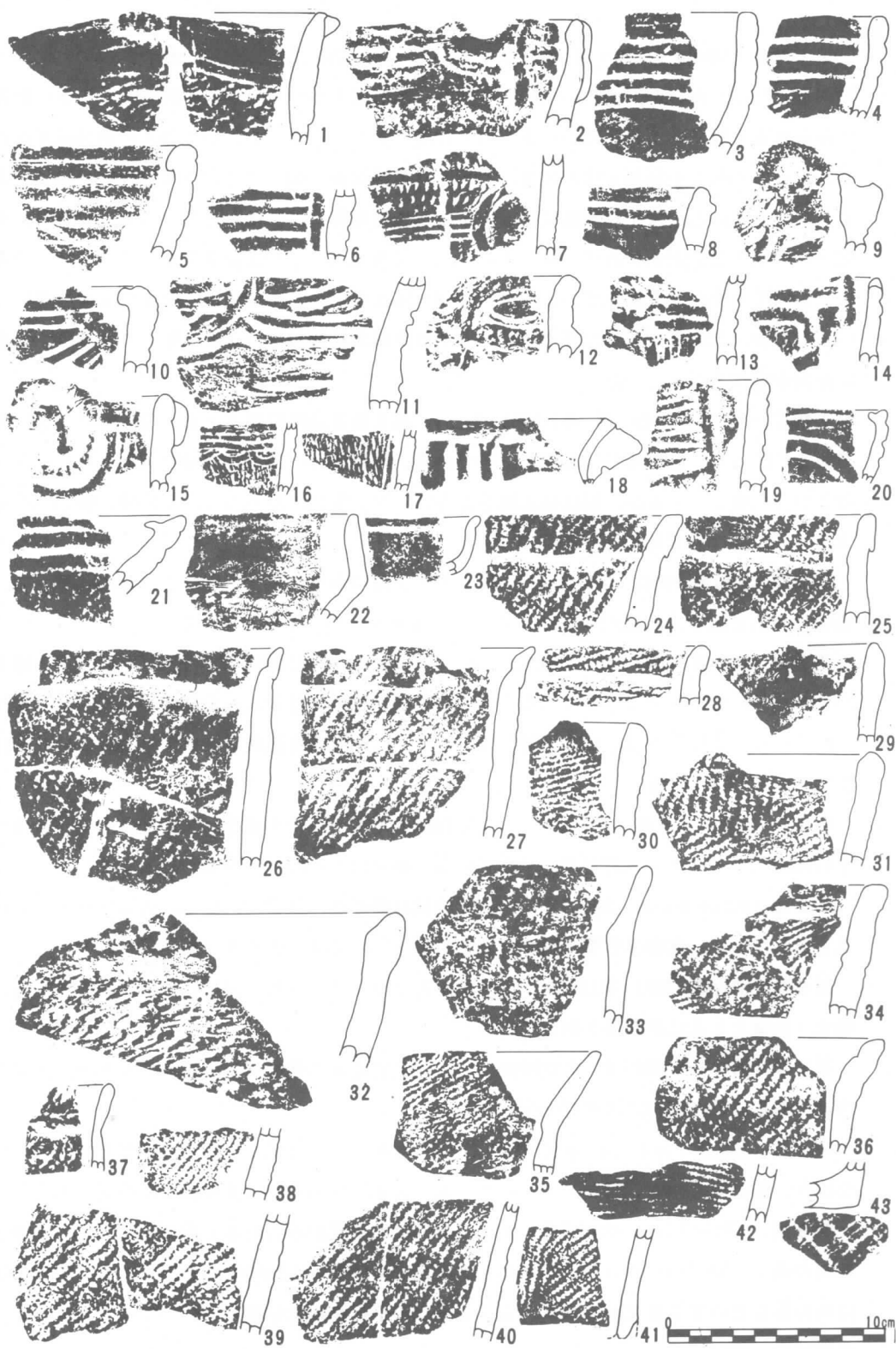
第5類（図版第6図50 第12図8） 若干波状口縁ぎみの土器で、胎土に雲母を含み、赤褐色を呈している。文様は竹管工具の背で押し引きした2条の沈線文が描かれている。

第6類（図版第6図51 第12図9） 頂部が丸く凹んでいる角形突起の口縁部破片である。胎土・色調とともに第5類と同じである。

第7類（図版第6図52・53 第12図10・11） 半隆起線で横にのびる弧状のモチーフを描く土器である。第12図11には沈刻文がみられる。

第8類（図版第7図1～4 第12図12～15） 隆線もしくは粘土の貼りつけなどでモチーフを描き、隆線等の間を刻目などでうめている。モチーフの違いにより細分が可能である。

第9類（図版第7図5 第12図16・17） 胴部に撚糸文がみられる土器である。この土器は器肉が薄く、器径が小さいなど、他の土器に比してかなり小形のものと思われる。第12図16^(註2)は剣野EなどのY字状文がくずれたような弧状の平行沈線文が撚糸文の上に施されている。色調は白っぽい。



第12図 グリット出土縄文土器

第10類（図版第7図6～8 第12図18～20） これまでの分類に含まれないものを一括した。それぞれが分類され得るものである。第12図18は器形がよく理解されないが、おそらく口縁部破片と推定される。19は第5・6類と同じ胎土・色調の土器で、微隆起線を中心にモチーフを描いている。

第11類（図版第7図9・10 第12図21～23） 第1類から第10類は深鉢形であるが、この類は浅鉢形を集めた。第12図22・23は無文である。

第12類（図版第7図11～15 第12図24～28） 口縁が外面へ折りまげられた「折り返し口縁」の土器群である。本遺跡からはこの5点が出土しただけである。いずれも縄文が施されている。口縁の形態は内そぎになり内面に段をもつようになっているもの（第12図26・27）と角ばっているもの（24・25・28）とがある。

第13類（図版第7図16～18 第12図29～32） 器面を飾る文様は縄文だけの粗製土器であるが、口縁が小さな山形を呈する一群である。第12図32は波頂部が割れており、口縁に沿って狭い無文帯がみられる。

第14類（図版第7図19～25 第12図33～42） 平口縁で器体全面に縄文が施されている。第12図37は内面に朱が塗られている。

第15類（図版第7図26 第12図43） 県内の中期前半の遺跡に普遍的であると千石原の報告^(註3)書で指摘している「箕の子」編みの痕跡が底面にみられる底部破片である。

（3）石器

本遺跡から出土した石器はここに図示した14点だけである。

凹石（図版第7図27～29 第13図1～3） 安山岩系の円礫を利用したものである。

磨製石斧（図版第7図30・31 第13図4・5） 磨製石斧は完形品と頭部欠損品が各1点出土している。第13図4は蛇紋岩製で、刃部先端から体3分の1ほどまでに使用痕が認められる。第13図5の石材は不明である。

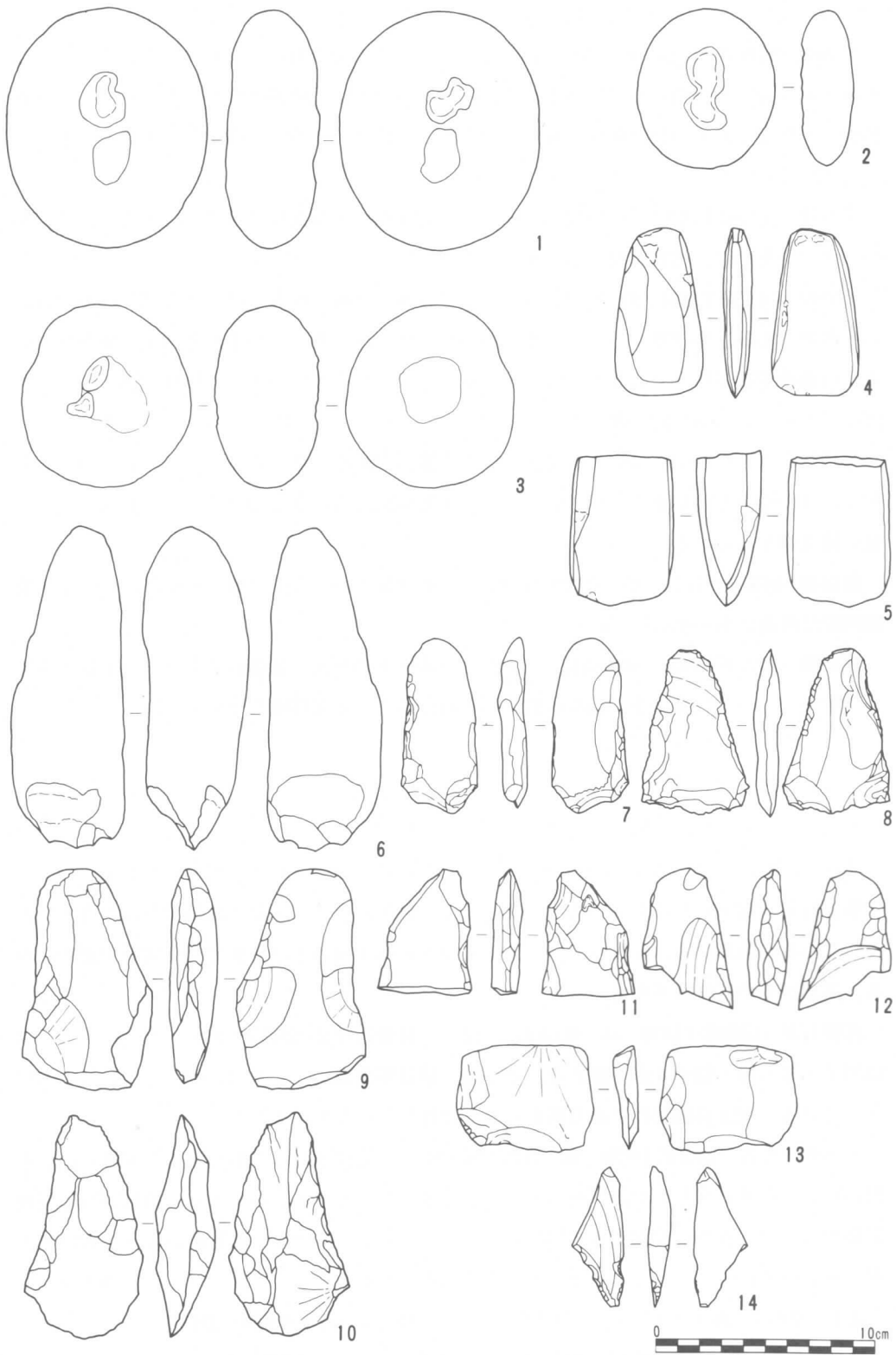
打製石斧（図版第7図32～38 第13図6～12） 打製石斧は泥板岩を使用したものが多く第13図7・8・11・12の4点を数える。その他、10は安山岩（?）、9は不明、6は頁岩を石材としている。6は刃部だけを両方向から交互に打ち欠いたものである。

その他の石器（図版第7図39・40 第13図13・14） 第13図13は打製石斧の刃部破片かとも思われるが、確証がなく用途不明の石器としておいた。石材は不明である。第13図14は泥板岩製のもので、石錐の刃部先端が欠損したものか、あるいはナイフ形石器のようなものであろうか。いずれにしてもこの2点は用途不明のものである。（駒形敏朗）

註1. 中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄「千石原」長岡市立科学博物館 1973年

註2. 金子拓男「新潟県柏崎市剣野E地点出土遺物について」信濃第19巻第2号 1968年

註3. 註1と同じ



第13図 グリット出土石器

第 IV 章 窯 跡

1. 位置及び立地 (第 5 図)

今回の発掘調査で確認できた窯跡は 1 基のみで遺跡のほぼ中央の IX C-1・2, c・d に位置し、南北の段丘を結ぶ段丘崖の斜面に所在する。標高は約 74m～約 75m を測り、等高線とはほぼ 120 度の角度で交わっている。窯跡の南側には埋没支溪が入り込んでおり、焚口面と埋没支溪の基底部との比高差は約 2 m である。(寺崎裕助)

2. 窯体各部の構造 (第 14 図)

窯体の規模及び形：全長約 440cm, 最大幅約 80cm, 確認面から床までの最大深度約 90cm を測る小型の半地下式の窯である。

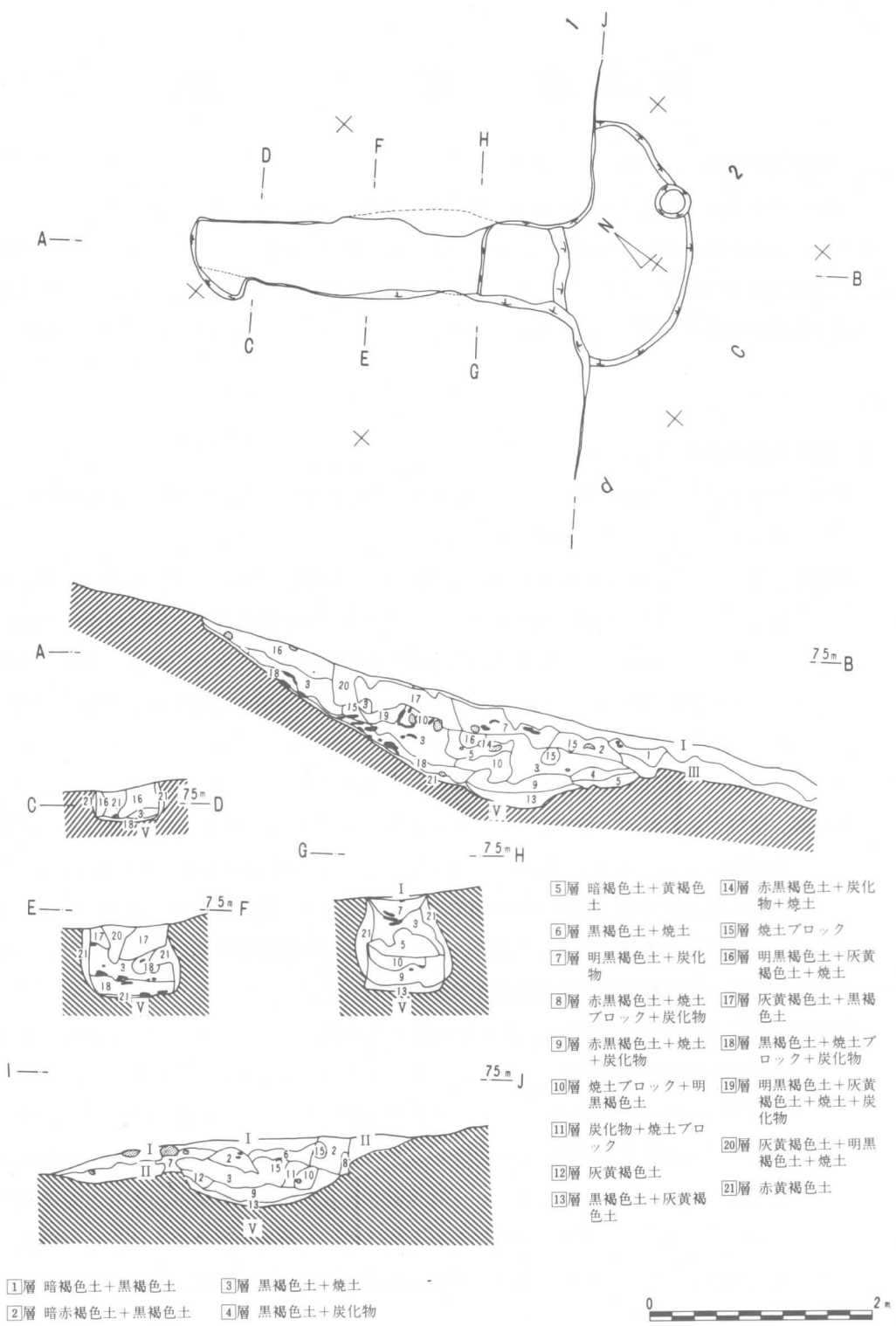
前庭部：焚口から続く斜面に長径約 220cm, 焚口からの距離約 100cm, 深さ約 15cm を測る半長円形のテラス状遺構が構築されている。テラス状遺構は焚口方向に向かって傾斜しており、焚口から左右に開折する壁は赤黄褐色を呈し、かたく焼け、下層より焼土、炭化物が多量に出土している。また、テラス状遺構の基底部南壁付近には直径約 30 cm, 深さ約 20cm の小ピットが 1 基設けられていた。

焚口：幅約 80cm で側壁はほぼ垂直に立ち上り、壁面は黄褐色にかたく焼けていた。

燃焼部：焚口と焼成部への傾斜がはじまる転換部との間で、1 辺約 80cm 四方、焚口からの深さ約 10cm を測り、方形の浅いピット状をなしている。側壁は弓なりにそり返っており、壁面も厚さ約 5 cm～約 10cm の範囲で赤黄褐色にかたく焼けていた。焚口に近いか所より炭化材が多量に出土しており、学習院大学理学部木越研究室に依頼し、この炭化材の一部で放射性炭素による年代測定を行った。

焼成部：奥壁までの長さ約 260cm, 床の最大幅は燃焼部の近くにあり約 80cm を測る。床は約 20 度の角度で立ち上り、床面上には黄灰色の砂の堆積が認められた。この砂は奥壁付近にはほとんど認められなかったが燃焼部に近づくにしたがいやや厚く堆積しており、床面直上の遺物の表面にもかなり付着している。このことから、この砂は焼き台と同じ役割をはたしていたとも推測される。側壁は燃焼部のそれと同様に弓なりにそり返り、壁面も赤褐色にかたく焼けていたが奥壁に近づくにしたがい壁の焼け方も弱くなっている。遺物は燃焼部付近の床面直上から杯、杯蓋が多く出土した。

煙り出し：奥壁付近では地山面への掘り込みも浅く、保存状態も良好とはいえ、今回の



第14図 窯 跡

調査では確認できなかった。

天井部：ほとんど残存しておらず、焼成部の一部分にひさし状に張り出すのみである。なお、燃焼部及び焼成部の内からは崩落した天井部と思われるスサを含んだ焼土塊が多く出土している。(寺崎裕助)

3. 灰 原

前庭部の下方には灰原と呼ばれるようなものは確認できなかった。また、今回の発掘調査区域内でも発見されず、存在しなかったと考えられる。しかし、今回の調査は遺跡全体を対象したものではなく、今後、未調査の区域で発見される可能性も若干残されている。

(寺崎裕助)

4. 出土遺物

本窯跡より出土した須恵器は杯、杯蓋、短頸壺、甕、鉢、横瓶である。それぞれの個体数はおおよそ、杯40個体、杯蓋30個体、短頸壺3個体、甕5個体、鉢1個体、横瓶3個体の合計約82個体と推測される。これらの須恵器は全般的に焼成が不良で、焼きひずみが目立ったが、窯体内よりまとまって出土しており一括遺物の可能性が強い。なお、これらの須恵器は器形で大別を、器形の微妙な変化及び法量等で細別を行った。

a. 杯(図版第11図1～図版第12図13 第15図1～第17図4)

高台の有無及び法量でA型～C型に大別を行い、口縁部の立ち上りで次のように細分を行った。

A₁型(図版第11図1～5 第15図1～5)

形態：底部は丸味をもつ平底で、口縁部は外反する。

法量：口径約17cm～約18cm、器高約5cm～約6cmを測る。

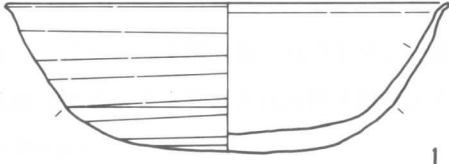
整形：底部外面回転ヘラ削り、口縁部の内外面及び底部内面にかけて轆轤ナデまたは仕上げナデが施されている。

A₂型(図版第11図6 第15図6)

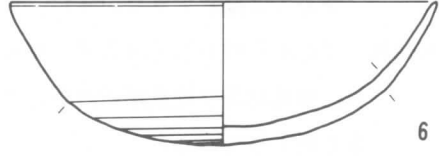
口縁部が外反せず、下部からのカーブに沿って立ち上るほかは法量、整形ともA₁型と同じである。

B₁型(図版第11図7～図版第12図6 第15図7～第16図11)

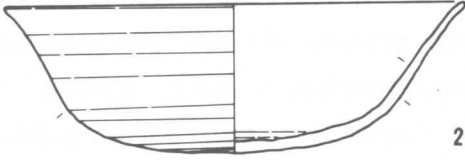
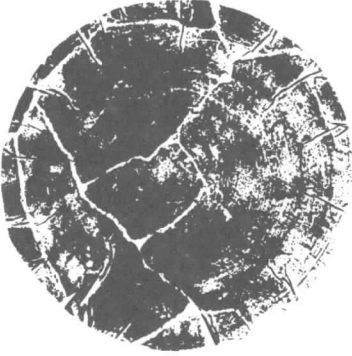
形態：高台は体部と底部の境よりも内側につき低く外側へふんばっている。体部と底部の境は丸味を持ち、口縁部の2cm～3cmあまりの下方から約70度の角度で外反し、底部はやや丸味を帯びた平底である。



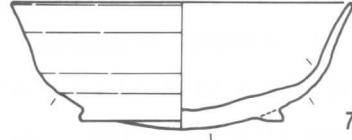
1



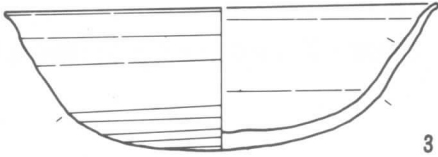
6



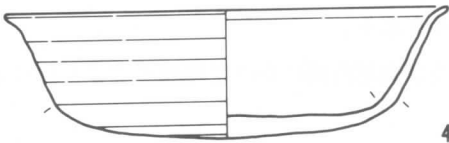
2



7



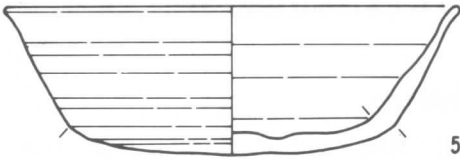
3



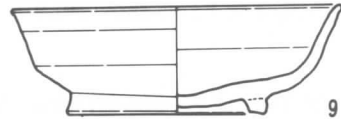
4



8



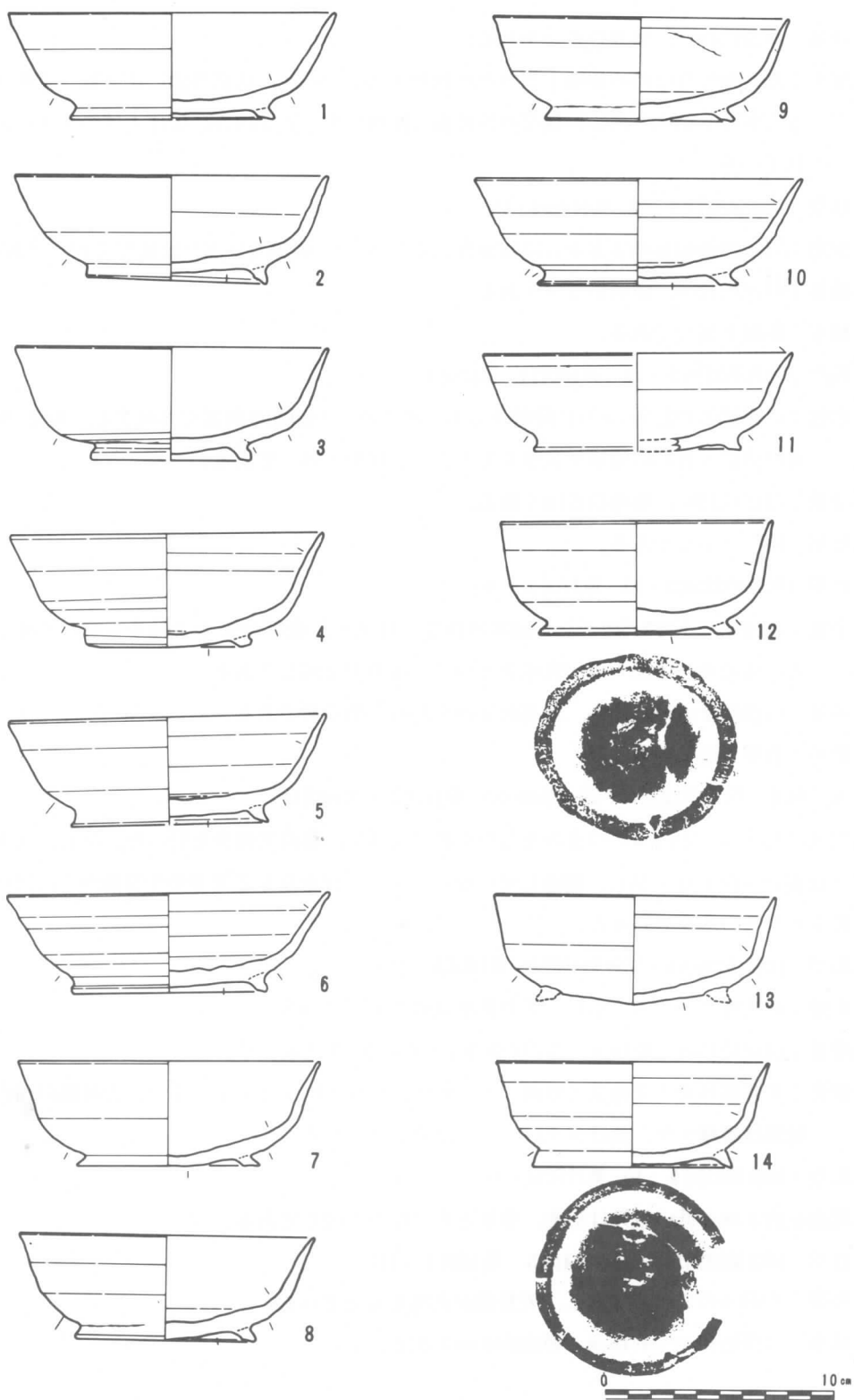
5



9



第15図 窯跡出土須恵器



第16図 窯跡出土須恵器

法量：口径約14cm，器高約5cmを測る。

整形：高台貼り付け時の轆轤ナデのため判然とはしないが，底部外面には回転ヘラ削りの部分が多く認められ，口縁部の内外面は轆轤ナデ，底部内面には仕上げのナデが施されている。

B₂型（図版第12図7・8 第16図12・13）

形態：口縁部の約3cm下方からほぼ垂直に立ち上るが，底部及び高台はB₁型と同じである。

法量：口径約12cm，器高約5cmを測る。

整形：B₁型と同じである。

B₃型（図版第12図9・10 第16図14，第17図1）

形態：口縁部の約2.5cm下方に陵線をもち，そこから約80度の角度で外反する。底部，高台及び体部と底部の境界が丸味をもつことはB₁型と同じである。

法量：口径約13cm，器高約5cmを測る。

整形：B₁型と同じである。

C型（図版第12図11～13 第17図2～4）

形態：口縁部の下方2.5cmから約60度の角度で外反し，底部は若干丸味をもった平底である。高台及び体部の境が丸味をもつことはB型と同じである。

法量：口径約9cm～約10cm，器高約4cmを測る小型の杯である。

整形：B型と同じである。

b. 杯蓋（図版第12図14～図版第14図5 第17図5～第18図11）

凝宝珠のつまみ，中凹みのつまみをもつもので大別し，器高で細分を行った。なお，端部は全て断面逆三角形状を呈し，屈曲していない。また，稜をなして下方やや内側向きに折れる端部をもつものも認められた。

A₁型（図版第12図14～図版第13図8 第17図5～13）

形態：凝宝珠のつまみを有し，天井部が丸味をもっている。

法量：口径約13cm～約16cm，器高約3.5cm～約4.5cmを測る。

整形：天井部外面の先端部は轆轤ナデ，他は回転ヘラ削りである。また，天井部内面の先端部は轆轤ナデ，他は仕上げのナデが施されている。

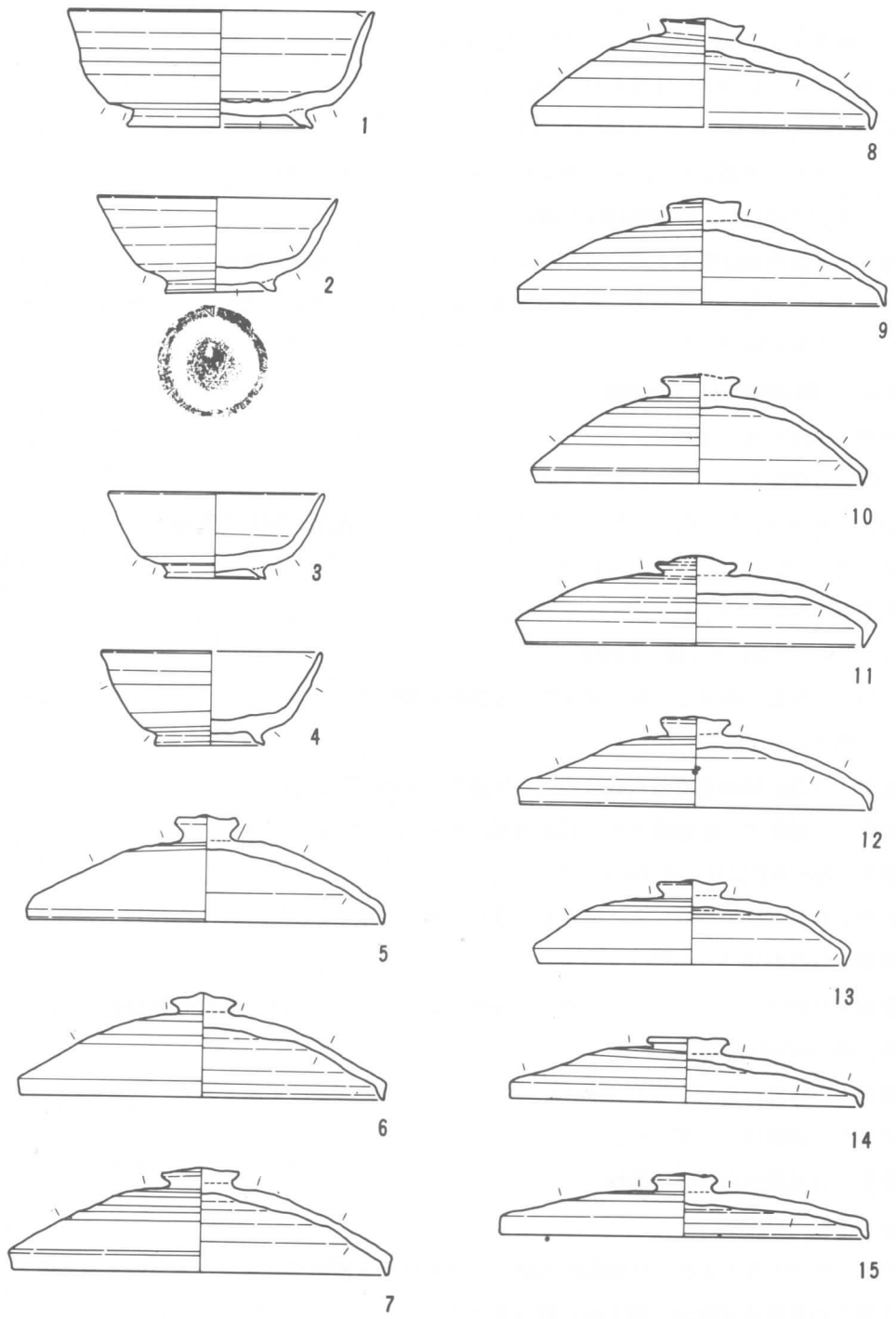
A₂型（図版第13図9・10 第17図14・15）

器高が約3cmと低い以外は形態，整形ともにA₁型と同じである。

B型（図版第13図11～図版第14図5 第18図1～11）

形態：中凹みのつまみを有し，天井部が丸味をもっている。

法量：口径約14cm～約16cm，器高約4cmを測る。



第17図 窯跡出土須恵器

整形：A₁型と同じである。

c. 短頸壺（図版第14図6～8 第18図12～14）

法量の違いで2型式に分類を行った。

A₁型（図版第14図6・7 第18図12・13）

形態：球形の胴部を有し、そこから短い頸部がほぼ垂直に立ち上っている。

法量：口径約11cm，器高約13cmを測る。

整形：表面全体は轆轤ナデ、口縁から胴部下半にかけての内面は轆轤ナデ、底部付近には仕上げナデが施されている。なお、底部は破損しているため、どのような整形がなされているか不明である。

A₂型（図版第14図8 第18図14）

形態：A₁型と同じである。

法量：口径約7cm，器高約9cmを測る。

整形：底部外面に回転ヘラ削りが施されている以外はA₁型と同じである。

d. 甕（図版第14図9～11 第19図1～5）

器形及び法量の変化で2型式に分類を行った。

A型（図版第14図9・10 第19図1・2）

形態：口縁部が外反し、撫で肩を呈する器形と推定される。しかし、破片のため詳細は不明である。

法量：口径約18cmを測るが破片のため器高等の他の法量は不明である。

整形：口縁部内外面轆轤ナデ，肩部内外に叩き目が施されている。

B型（図版第14図11 第19図3～5）

形態：口縁部はやや外反し，肩が丸く落ちる器形を呈する。

法量：口径約10cm～約13cmを測る。

整形：口縁部から胴部にかけて内外面轆轤ナデ，胴部下半の内外面に叩き目が付されている。

f. 鉢（第18図15）

形態：口縁部が外反するが，小破片のため器形全体の詳細は不明である。

法量：口径約16cmを測るが底径等は不明である。

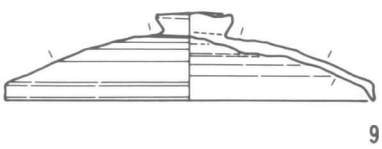
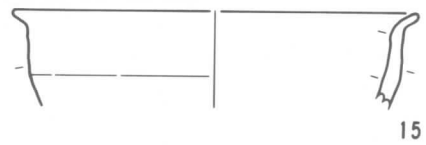
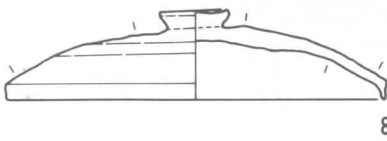
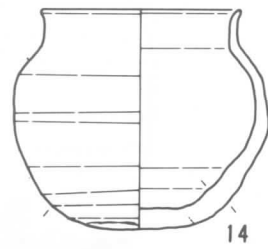
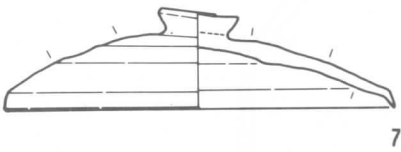
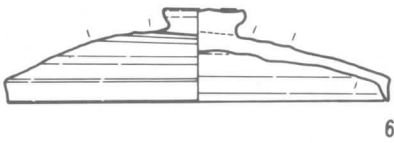
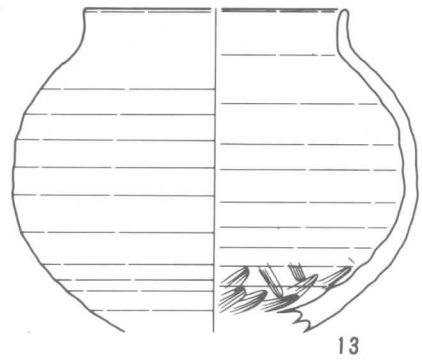
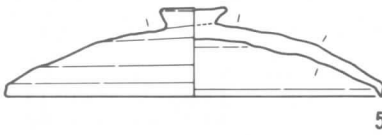
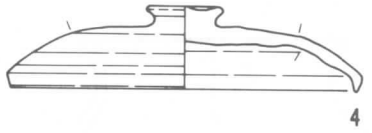
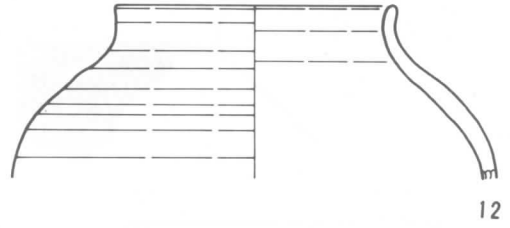
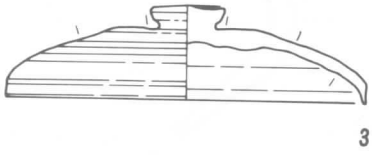
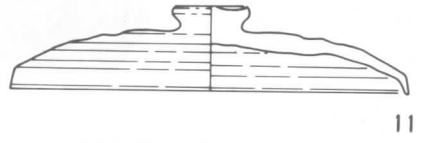
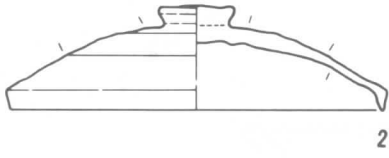
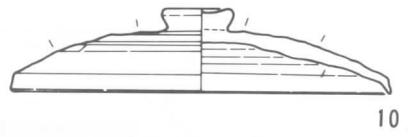
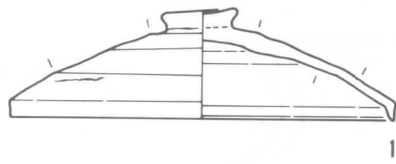
整形：口縁部の内外には轆轤ナデが施されている。

g. 横瓶（第20図）

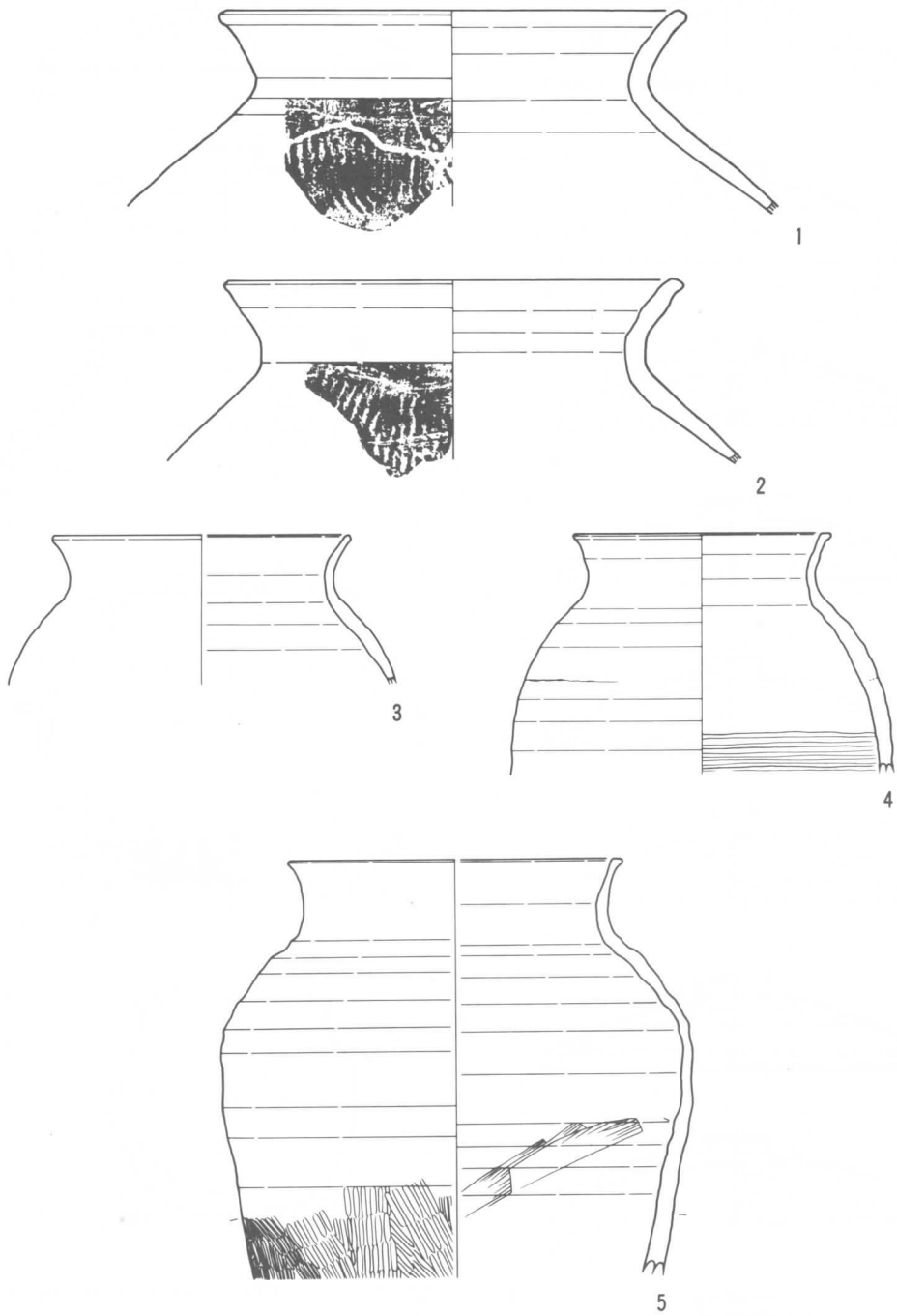
形態：俵形を呈するが，口縁部が欠損しているため全体のプロポーシオンは不明である。

法量：残存器高約22cm，最大幅約37cmを測る。

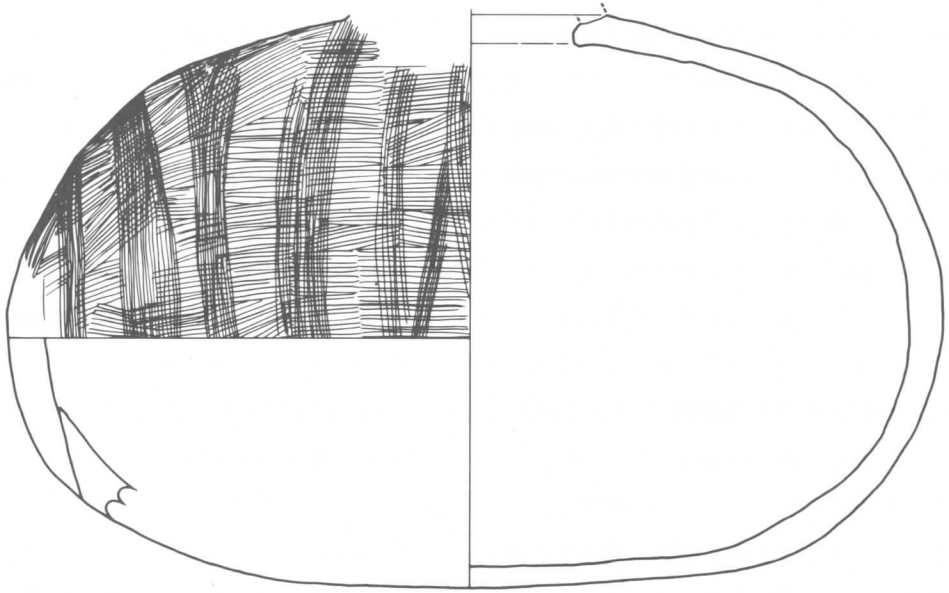
整形：体部全体にカキ目（？）と叩き目が認められる。（寺崎裕助）



第18图 窯跡出土須恵器



第19図 窯跡出土須恵器



第20図 窯跡出土須恵器



第 V 章 年 代 測 定

1. 笹山窯の考古地磁気測定

(1) 考古地磁気学

地磁気の継続的な観測は16世紀の後半にロンドンではじめられたのが最初で、その後、パリ、ローマなどで17世紀初めからつづけられている。我国では19世紀末になってやっと観測が行われたことから、それ以前の時代の地磁気変化に関する記録は殆んどない。わずかに主に西欧から渡来した船の羅針盤を用いた偏角の測定の記録が17世紀の初頭頃(註1)から散見されるにとどまる。1613年に五島列島や平戸で行われた記録が最初である。

これらの観測の結果から知られたことは、地磁気の方法は一定不変のものではなく、時間とともに少しずつ変わっており、百年以上のような長い時間をとってみると、相当な方向変化を示しているということである。この変化を地磁気永年変化という。ロンドン、パリ、ローマなどでは17世紀以来の400年程の間に偏角は最大40°、伏角も10°以上変化しているのである。

それでは地磁気観測が始まる以前の時代について地磁気永年変化を知ることはいかなるだろうか。磁針を用いたコンパスが発明される以前の地磁気の方法を知るうまい方法が見つけられたのである。それが、遺跡に残る焼土を用いる考古地磁気学の方法である。土の中には鉄の酸化物が1～数%含まれているが、これは磁石になる性質を持っている。謂ゆる“砂鉄”というのがこれで、磁鉄鉱と呼ばれている鉱物である。磁石になった磁鉄鉱を温度を上げていくと、ある温度に達すると急に磁化が弱まり、それ以上の温度では磁石の性質を失ってしまう。この温度をキュリー一点と呼んでいるが、磁鉄鉱の場合は575℃である。土が焼かれてこの温度以上になると、当然土の中の磁鉄鉱も磁化を失う。次いで、火を落して土が冷えはじめ温度がこのキュリー一点を通過した時から、磁鉄鉱は再び磁石になる性質をとりもどし、磁化をもつようになる。この時、磁鉄鉱が獲得する磁化の方向は、その磁鉄鉱が受けている地磁気の方法に平行なものとなる。すなわち、焼土が全体として弱いながらも磁石となり、しかも、その磁化方向が焼かれた後の冷える時の地磁気と同じ方向になるのである。このようにして獲得される磁化を熱残留磁気と呼んでいる。

(2) 年代推定

遺跡焼土の熱残留磁気の方法を測定し、その遺跡の年代を別の方法で求めれば、過去の地磁気の永年変化の様子を明らかにすることができる。これを考古地磁気学と呼ぶ。最近の2000年間については西南日本の多くの遺跡の測定結果から地磁気永年変化が相当詳しくわかっている。(註2)考古学的な時代の永年変化であるという意味で、考古地磁気永年変化というこ

第1表 笹山窯の残留磁気測定の結果

Sample No.	Declination (°E)	Inclination (°)	Intensity ($\times 10^{-5}$ e.m.u./gr)
SN 1	-19.02	49.42	5.02
2	-14.60	55.15	7.45
3	-36.72	57.17	11.51
4	-30.30	60.58	10.52
5	-22.29	56.75	14.03
6	-16.67	51.99	4.44
7	-29.10	58.81	15.33
8	-17.93	57.95	9.93
9	-28.58	60.56	12.71
10	-16.20	60.64	11.66
11	-24.45	62.44	19.82
(12	-19.14	67.90	21.14)
13	-23.13	56.25	21.93
14	-24.76	59.04	30.51
15	-14.87	51.25	41.66
16	-19.71	56.36	67.68
17	-30.34	57.50	25.73
Mean	-22.92	57.16	19.37

第2表 笹山窯の考古地磁気測定結果

Kiln Name	N	\bar{D} (°E)	\bar{I} (°)	α_{95} (°)	K	Intensity (e.m.u./gr)
Sasayama	16	-22.92	57.16	2.35	248.16	1.94×10^{-4}

N : 試料個数

α_{95} : フィッシャーの信頼角

\bar{D} : 平均偏角

K : フィッシャーの精度パラメータ

\bar{I} : 平均伏角

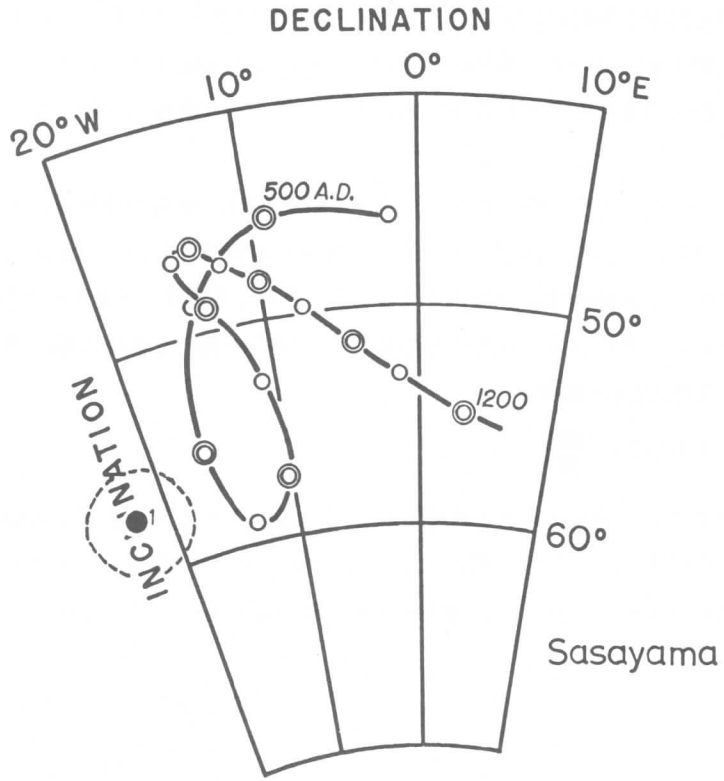
とが多い。この永年変化曲線が出来上ると、今度は逆に遺跡焼土の残留磁化方向からその遺跡の年代の推定を行うこともできるようになる。これが考古地磁気法と呼ばれる年代推定法であるが、はじめに、他の方法で年代あるいは時代のわかった遺跡の磁化方向から考古地磁気の永年変化曲線を求めているので、その時用いた時代の決め方と独立な時代を得ることができない。したがって、この方法はむしろ相対編年法と考える方がいいのかもしれない。

窯のような何度も焼かれたものであれば、温度が上がる度毎に前に焼かれた時の残留磁気は消されて、新たに冷える時に磁化しなおすことになり、最後に焼いた時のものが現在まで残っている。使用期間の長い窯の場合には、最初と最後の焼成の時では、相当地磁気の方角が変っていることもあり、こんな場合には最終焼成の時の年代が出ることに注意しなければならない。

(3) 試料採集と残留磁気測定

笹山窯の考古地磁気測定のために17個の試料を採取した。試料番号はSN1～17である。にぎりこぶし大の焼土を動かないように注意しながら石膏で固め、窯体内でのその方位を測ってから採取する。方位はクリノメーターの磁針を用いて行うので、磁北をもとにしたものである。磁北と真北とは少しずれているので、そのずれを補正する必要があるが、場所によってそのずれの大きさが異なるため、遺跡の現場でトランシットを用いた太陽の方位観測をしてそのずれを求めた。その結果、笹山窯の地点での現在の偏角は西偏8.12度であった。この値を用いて試料の方位の補正を行った。残留磁気の測定によって得た結果は第1表に掲げられている。この内、試料番号SN12は磁化方向が他のものと大きく異なっているため、笹山窯の平均磁化方向を求める統計計算の時には省いた。

笹山窯全体の磁化方向として、磁気測定の結果得た試料の磁化ベクトルの平均値を求める。そして、その平均値の誤差の大きさとして、フィッシャーの信頼角 (α_{95}) と精度パラメーター (K)^(註3) を計算する。 α_{95} は求めた平均磁化方向が95%の確率で存在する範囲を示すものである。個々の試料の磁化方向のバラつきが小さければ、この α_{95} も小さな値をとる。 K は平均的な2個を選んで、それらの磁化のうち平均磁化方向に向いた成分の大きさがそれを乱す成分に対して何倍であるかを示す値である。全ての試料の磁化方向が完全に同じにそろっている場合は K は無限大になり、全くランダムな方向を持っている時に0となる。一般的な須恵器窯では α_{95} は1～3°の間にあり K は100～1000の値をとる。笹山窯の測定結果から計算したこれらの考古地磁気データは第2表ようになる。同表には、計算に用いた試料個数 (N)、平均偏角 (\bar{D})、平均伏角 (\bar{I}) および、バラつきを表す α_{95} と K が示されている。



第21圖 考古地磁氣測定結果

(4) 笹山窯の考古地磁気年代

西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線のうちA.D.450年から1200年までの偏角・伏角の変化を表わしたのが第21図である。この時代は偏角が西偏しているのが特徴で、特に6世紀後半から7世紀前半にかけてが最もその傾向が著しい。第2表に示した笹山窯の考古地磁気測定結果も第21図に記入されている。黒丸が平均磁化方向でそれを囲む楕円の破線が α_{95} の範囲を示している。偏角の西偏が著しく、永年変化曲線からはずれているが、曲線の最も近い部分の年代は7世紀初頭にあっており、考古地磁気学的にはこの可能性が最も高い。

しかし、今までの多くの測定例から、7・8世紀には、偏角の地域差が大きい傾向が見られ、東および北にいく程、西南日本に比べて偏角の西偏が著しいことが知られている。したがって、新潟でも同様の傾向があると考えられ、それを考慮すると8世紀の初頭になる可能性も否定できない。考古地磁気学的な推定年代は可能性の高いものから順に次のようになる。

1. A.D.620年 \pm 25年

2. A.D.710年 $\begin{matrix} +25\text{年} \\ -50\text{年} \end{matrix}$

推定年代の誤差は、 α_{95} の大きさをもとにして見積ってあるが、正確に計算して出せる値ではなく、目安程度のもんとして考えてもらった方がいい。今後、もっと多くの須恵器窯の考古地磁気測定を北日本で行ない、偏角・伏角の地域差をもっと詳しく調べる必要があると考えている。

(広岡公夫・青木ますみ・坂本道恵)

引用文献

- 註1. Imamiti, S. (1956) Secular variation of the magnetic declination in Japan, *Memoirs of Kakioka Magnetic Observatory*, 7, 49-55.
- 註2. Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, *Memoirs of Faculty of Science, Kyoto Univ., Ser. Geology and Mineralogy*, 38, 167-207.
- 註3. Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere, *Proceedings of Royal Astronomical Society of London*, 217, A, 295-305.
- 註4. 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, *第四紀研究*, 15, 200-203.

2. 放射性炭素による年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1981, 12月26日

長岡市教育委員会殿

1981年2月3日受領致しました試料についての¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma) に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値 (B.P.) のみを表示してあります。また試料のβ線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記してあります。

記

Code No.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)
GaK-9568.	Charcoal from Sasayama Site. Sample No. Sasayama-156. (Dated on alkaline pretreated charcoal)	1700±70 A.D. 250
GaK-9568a.	The same sample of GaK-9568. (Dated on total charcoal)	2560±100 610 B.C.
GaK-9569.	Charcoal from Sasayama Site. Sample No. Sasayama-172. (Dated on alkaline pretreated charcoal)	1000±100 A.D. 950
GaK-9569a.	The same sample of GaK-9569. (Dated on total charcoal)	2480±110 530 B.C.
GaK-9570.	Charcoal from Sasayama Site. Sample No. Sasayama-180. (Dated on alkaline pretreated charcoal)	1140±110 A.D. 810
GaK-9570a.	The same sample of GaK-9570. (Dated on total charcoal)	2540±110 590 B.C.

GaK-9568a, 9569a, 9570aは1M塩酸による前処理のみを行った炭についての測定結果です。GaK-9568, 9569, 9570は上記の酸処理を行った後1%NaOH溶液と加熱し、アルカリ可溶の部分除去した残りについて測定した結果です。GaK-9568はアルカリ可溶のものが残っていたため古い年代を与えた可能性が強いと思います。いずれにせよ、本試料中には、アルカリ可溶の古い有機物がかなりの量含まれていたと考えられます。

以上

(木越邦彦)

第 VI 章 考 察

1. 縄文時代の笹山について

本遺跡の調査は土取工事に伴うものであり、おのずから調査範囲が限定されていた。そのため、調査地の遺跡全体における位置や占有面積の詳細は不明である。しかし、このような制約を受け、十分な検討を加えることができないが、ここでは今次調査で得られた資料を再整理しながら、縄文時代における笹山の性格をさぐっていきたい。

まず、遺構からもう一度みていこう。遺構は径80~200cm、深さ20~50cmの浅くて大きなピットが上段に1基、下段に3基ある外、径30~40cm、深さ30~40cmの柱穴らしきピットが6基、XICに所在していた。これらのピットには覆土上面に焼土があるP₄、大きな土器片のあるP₃以外には性格をさぐる手がかりがない。また、P₃・P₄ともその性格を考える資料が少なすぎる面をもっており、外のピットともども積極的に性格づけが困難である。いわば、笹山遺跡発見のピットは「性格不明のピット」とでもしておいた方がより無難であろう。本遺跡にはこれらのピットの外に遺構は発見されていない。もちろん住居跡はおろか、炉跡さえ1基も発見されていない。果して、笹山には住居が存在していたのであろうか。この問題を考える時に大きく立ちはだかるのが、調査地が限定されていたことである。このことの解決は将来の調査にゆだねるほかはない。

次に遺物についてみていくことにする。遺物は上・下段ともに少量ながらも分布しているが、IX・XBを中心とした埋没支溪の底面近くから遺物の半数以上が出土している。この埋没支溪が岩野原で発見されたような土器捨て場(註1)を構成していたのであろうか。これも調査地に制約があるため、その根拠は当然ながらきわめて薄い。

また、遺物のうち石器は石斧が主体的で他に凹石、用途不明の石器があるだけにすぎない。石鏃をはじめ、各種石器が組成上から欠落している。このことも笹山を考えていく上で大きな特色のひとつとなろう。

さて、次に本遺跡の時間的位置づけを行うために欠くことのできない土器について考えてみよう。本遺跡出土土器で主体的なのはカマボコ状に盛りあがった平行沈線文の土器である。この平行沈線文に爪形文「C」を施した第1類が最も多く、飾られた所謂精製土器の半数以上を占めている。次いで、平行沈線文だけの第3類、折り返し口縁の第12類が5~6点ほどで、他は1ないし2~3点と極端に少ない。このことから、ここでは本遺跡の主体を占める爪形文土器を中心(註2)に考えを進めていくこととする。爪形文の土器は県内では津南町上野、三島町千石原(註3)、栄町吉野屋(註4)、田上町古屋敷(註5)、それに長岡市岩野原などの遺跡からも出土し、報告されている。いずれも中期前葉に位置づけられている。そして、より細かな時間を最近の

研究成果をもとにしてもとめるならば、千石原 I-1、吉野屋第三段階、古屋敷 B に類似性が強く求められよう。しかし、これらの各遺跡には、千石原でいう I-3 つまり東北方面の様式と関連する土器一大木 7 b 式にみられる撚糸圧痕文の土器が出土しているが、本遺跡では 1 点も出土していない。なぜ笹山には出土しないのであろうか。ひとつには空間的な差も考えられよう。しかし、近接する岩野原からは中期前葉 A-第 2 類として報告されており、空間的な差と考えることは困難であろう。しからば時間的な差——千石原 I の時期におけるより細かな時間の差であらうか。吉野屋では本遺跡第 12 類の折り返し口縁の土器を爪形文の第三段階より一時期古い第二段階に位置づけている。それ故に笹山の土器群は千石原 I よりも若干古い可能性があるといえよう。この吉野屋第二段階は従来中期初頭に編年されていた剣野 E 式^(註 7)を二分したものであり、剣野 E 式には東北の円筒下層式の影響を色濃く受けた木目状撚糸文の土器が伴出している。このように県内の縄文中期前葉の土器には東北地方の影響を多少なりとも受けながら成立していると見ることができよう。とすれば、本遺跡で東北地方の影響を受けた土器が出土しないということを解決する糸口はどこにあるのであろうか。確かに遺跡全体を発掘していないところにも原因があるのかもしれない。しかし、遺構等を含めた遺跡全体をもう一度ふりかえってみてはどうであらうか。

本遺跡は、岩野原・吉野屋・千石原などと比較した時、かなり面積の小さな遺跡であると思われる。また遺構は性格不明のピットだけで、住居跡は発見されておらず、石器の組合せは前述のとおりであり、土器型式もほぼ一型式だけである。これらの特徴は小林達雄氏が提唱された遺跡のセトルメント・パターン D の内容に近いといえるのではないか。それにひきかえ、岩野原・吉野屋・千石原・古屋敷などの遺跡はパターン A もしくは B に相当するものであろう。このセトルメントの相違が東北地方の影響を受けた土器が、本遺跡では出土しないということの解決になり得ようか。しかし、これでもって問題を解決していくにはあまりにも資料の蓄積が少なく、結論を下すには早急すぎよう。このことも今後の研究課題のひとつに含めてもよいのではないか。そして地域における遺跡相互間の役割りも考えていってもよいのではないだろうか。つまり笹山の近くには岩野原というパターン A クラスの遺跡があり、そこがセンター的な集落として、近隣には小さなパターン C・D クラスの遺跡が位置し、互いに機能的に結びつき、縄文社会を形成していたのであろうか、ということをも。(駒形敏朗)

註 1. 駒形敏朗・寺崎裕助「埋蔵文化財発掘調査報告書——岩野原遺跡——」長岡市教育委員会

1981年

註 2. 江坂輝弥・可児弘明「上野遺跡」津南町教育委員会 1962年

註 3. 中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄「千石原」長岡市立科学博物館 1973年

註 4. 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班「吉野屋遺跡」1974年

註5. 中島栄一他「古屋敷遺跡」田上町教育委員会 1976年

註6. 註1と同じ

註7. 金子拓男「新潟県柏崎市剣野E地点出土遺物について」信濃第19巻第2号 1968年

註4と同じ

註8. 小林達雄「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて——」月刊文化財昭和48年1月号 1973年

2. 窯跡について

先述したように本遺跡からは岩野原窯跡などと同じく段丘崖の斜面に構築された半地下式の小型な須恵器窯が1基検出された。だが、この窯跡には灰原と呼ばれるようなものは存在しなかった可能性が強く、燃烧部の焚口に近い箇所より炭化材が、燃烧部及び焼成部の内からは、崩落した天井部と思われるスサを含んだ焼土塊が多く出土し、窯体内からは、全般的に焼成が不良で焼きひずみが目立つ杯・杯蓋・短頸壺・甕・鉢・横瓶が合計82个体余り一括して出土するなどの特徴が認められた。これらのことから本窯跡はただ一回の焼成途中で何らかの要因で放棄された窯であったのではないかと考えられる。

本文では窯体内より一括して出土した須恵器の中から杯と杯蓋を選択し、下記に示すようなそれらの微妙な器形変化や整形技法を目安として出土須恵器の年代的な位置づけをこころみ、本窯跡の構築年代の推定を行いたい。しかし、本窯跡出土の須恵器と類似する資料は新潟県内では現在まで報告されておらず、それに加えて本県における須恵器研究の現状からも県内の資料と比較して年代推定を行うことは困難である。それゆえ、今回は須恵器と伴出する木簡の資料から明確な年代決定を行っている平城宮土器編年(註2)に本窯跡出土の須恵器を対比させることによって年代的な位置づけを行いたい。

杯、杯蓋に認められる特徴は次のようである。

- ①杯の底部外面に回転ヘラ削りの痕跡が認められる。
- ②杯の体部と底部の境界は丸味を持っている。
- ③杯Bの高台は外側へふんばり、低く、体部と底部の境界よりも内側につけられている。
- ④杯蓋の天井部外面には回転ヘラ削りの痕跡が、天井部内面には仕上げナデの痕跡が認められる。
- ⑤杯蓋の天井部先端には屈曲が認められない。
- ⑥杯蓋の天井部は丸味を持ち高いものが多い。
- ⑦杯蓋の端部の断面は逆三角形を呈する。また、稜をなして下方やや内側向きに折れる端部をもつものも認められた。
- ⑧杯蓋の内側にはかえりを有しない。

上記の①～③は平城宮 S D 1900 出土の杯 A 及び B に、^(註3)④～⑦は同じく S D 1900 出土の杯蓋 B に類似する特徴であり、S D 1900 出土の須恵器は平城 I に^(註5)比定されている。さらに、⑤の特徴は平城 II に^(註6)位置づけられている S D 485 出土の杯蓋には認められず、⑧の上限は飛鳥 V に^(註8)求められる。ゆえに本窯跡出土の須恵器は藤原京以降平城 I まで(694年～710年)、つまり7世紀末～8世紀初頭の間^(註7)に年代的な位置づけがなされよう。しかし、多少の地域差をかながみて8世紀前半の古い段階に本窯跡出土の須恵器の年代的^(註9)位置を^(註10)求めることがより妥当であろうと考えられると同時に本窯跡の構築年代もほぼその段階と推定されよう。

また、本窯跡は科学的分析によっても年代測定が行われた。一つは考古地磁気による年代測定であり、他の一つは放射性炭素による年代測定である。前者の測定結果は①A.D. 620年±25年、②A.D. 710年^{+25年}₋₅₀であり、後者のそれは①1700±70(A.D. 250)、②1000±100(A.D. 950)、③1140±110(A.D. 810)等であった。なお、今後に残された問題点としてはこれらの須恵器の供給先の追求、^(註9)間野・羽黒窯跡等の窯跡出土須恵器の再検討及び本窯跡周辺における窯跡分布調査の必要性があげられる。(寺崎裕助)

註1. 中村孝三郎「岩野原窯址」先史時代と長岡の遺跡 長岡市立科学博物館 1966年

註2. 小笠原好彦・西弘海「第5章考察・土器」平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所 1976年

註3. 稲田孝司「第Ⅳ章遺物・須恵器」平城京発掘調査報告Ⅸ 奈良国立文化財研究所 1978年

註4. 註3と同じ

註5. 註2と同じ

註6. 註2と同じ

註7. 小笠原好彦「第Ⅵ章考察・S D 485出土の土器」平城宮発掘調査報告Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1975年

註8. 西弘海「第Ⅴ章考察・土器の時期区分と型式変化」飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ 1978年

註9. 中川成夫他「古志郡山本村間野窯址発掘調査報告」越佐研究第13集 1958年

註10. 中村孝三郎「羽黒窯址」先史時代と長岡の遺跡 長岡市立科学博物館 1966年



遺跡遠景



遺跡近景



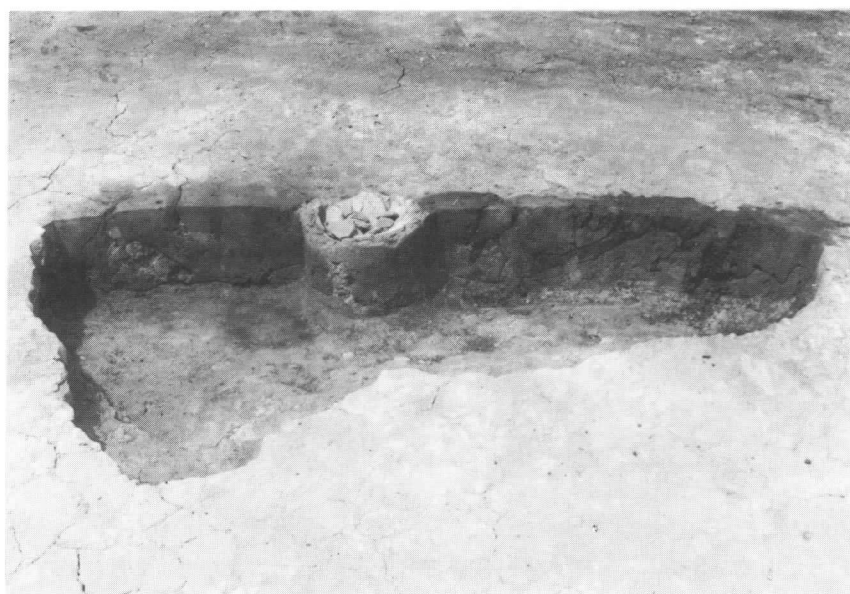
調査風景



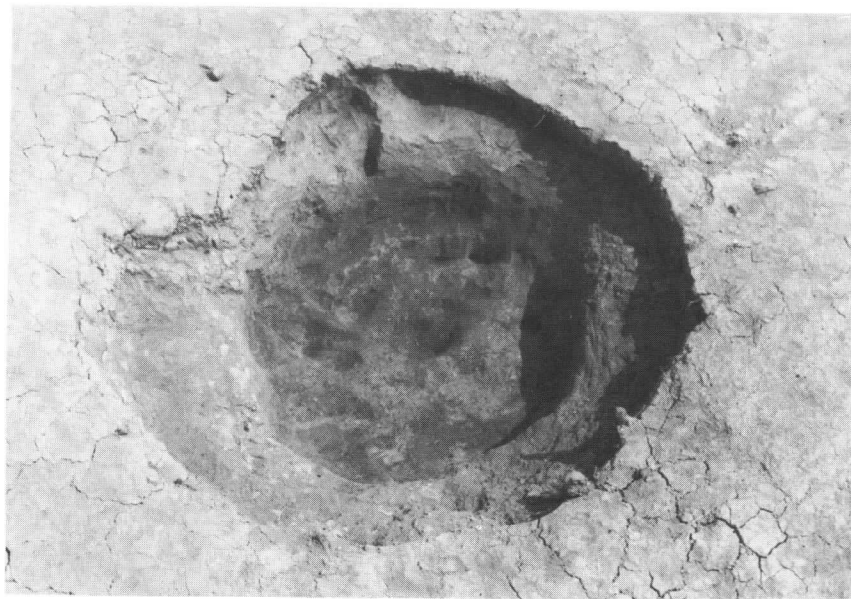
調査風景



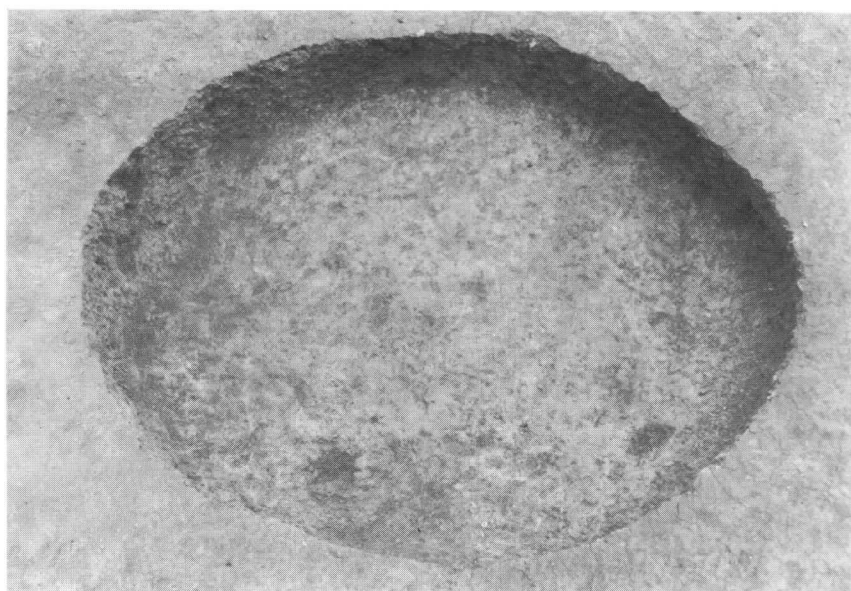
第4号ピット土層断面



第3号ピット土層断面



第4号ピット完掘状態



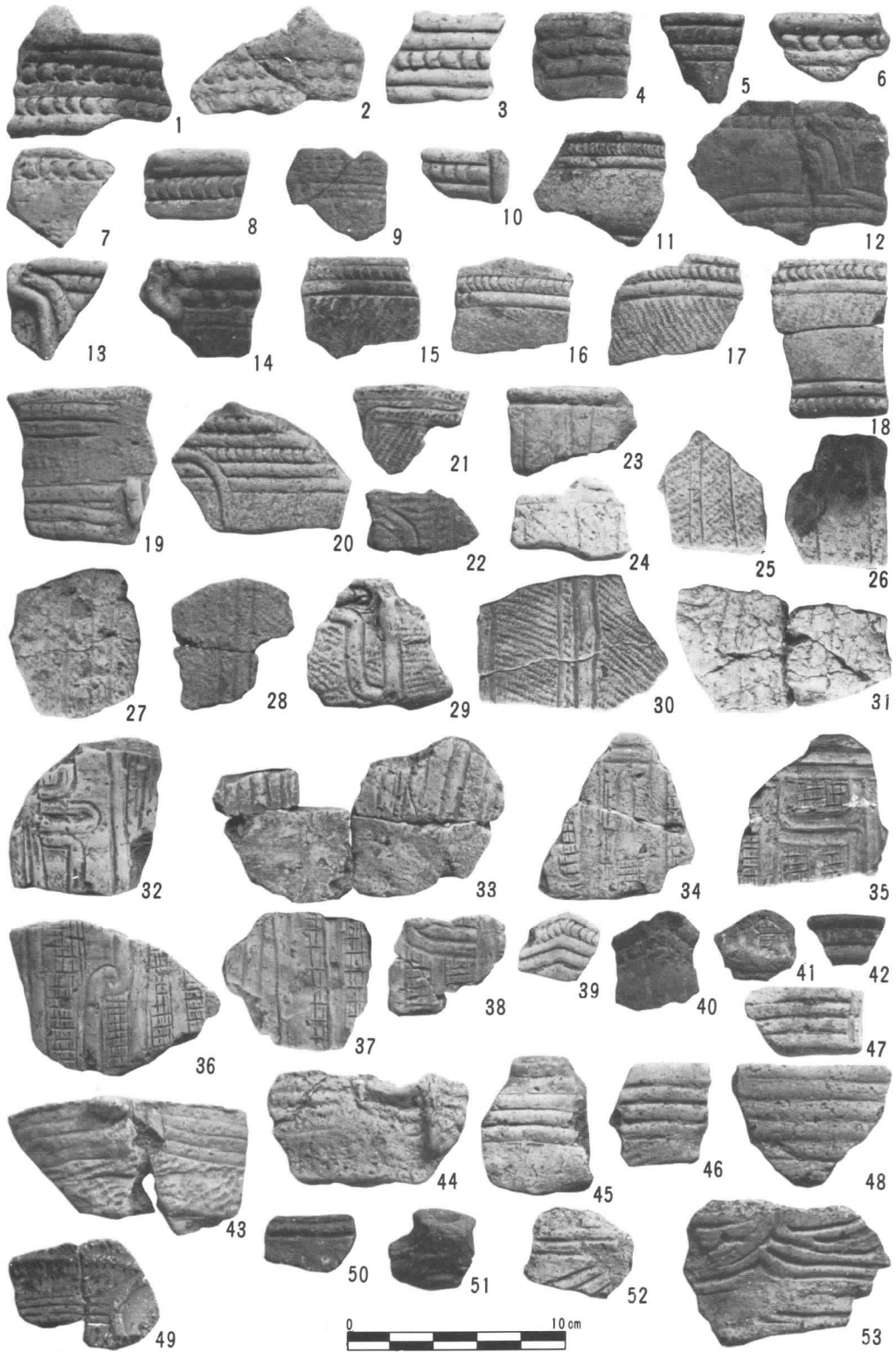
第1号ピット完掘状態



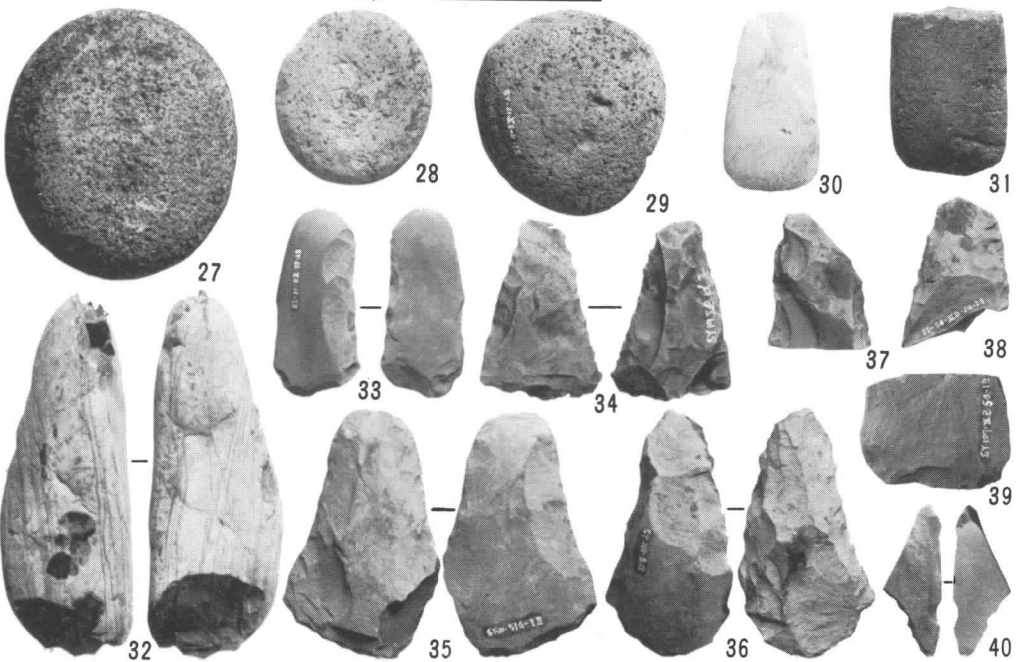
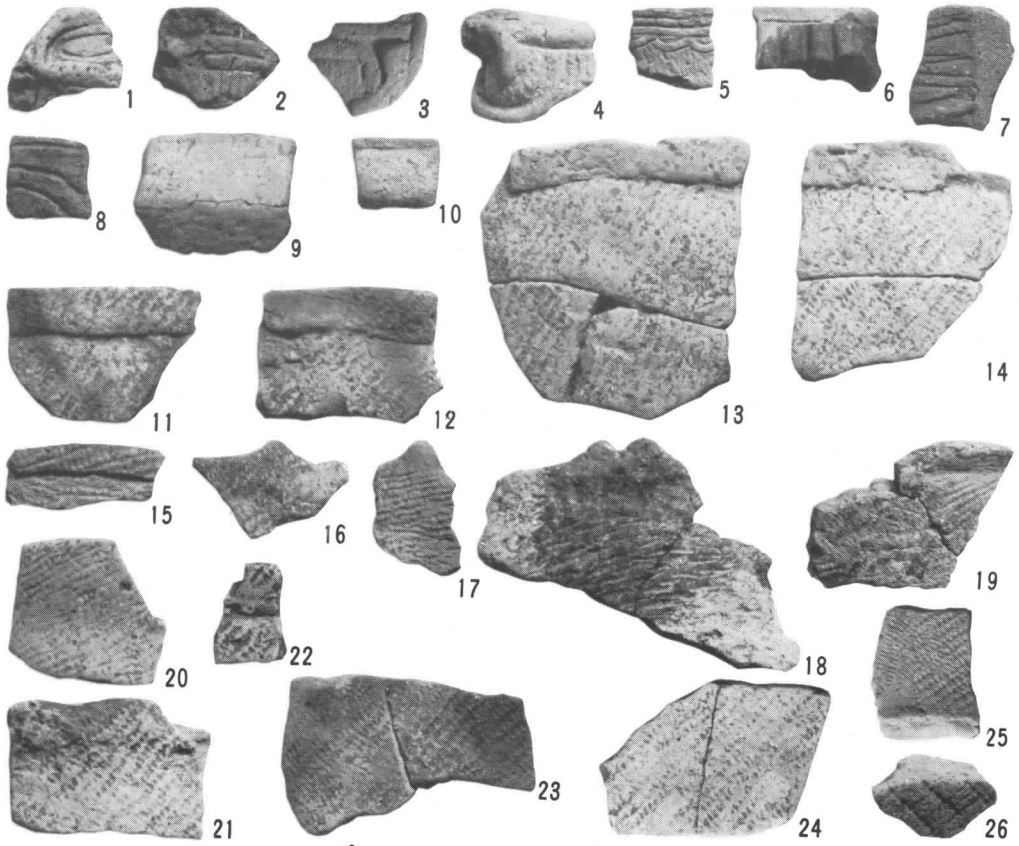
完掘状態(V~VII B~H)



完掘状態(VII~XII B~G)



グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器(1~26)・石器(27~40)



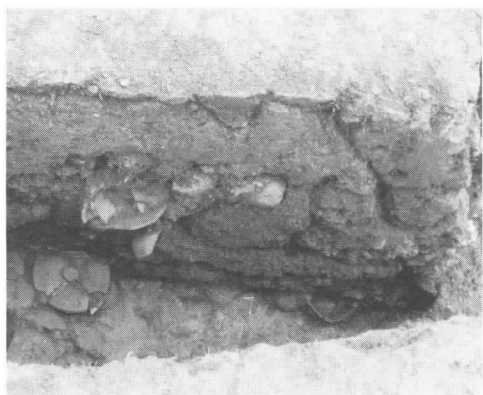
窠跡完掘状态



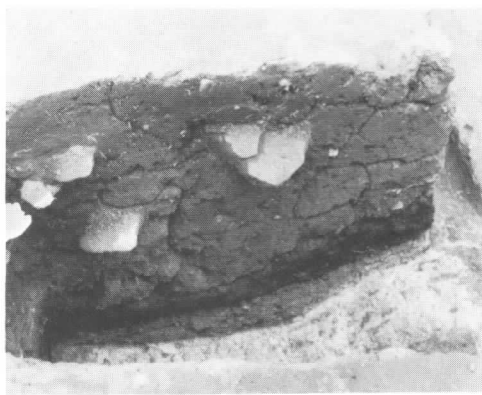
東 壁



東 壁



南 壁



南 壁

窠跡土層断面



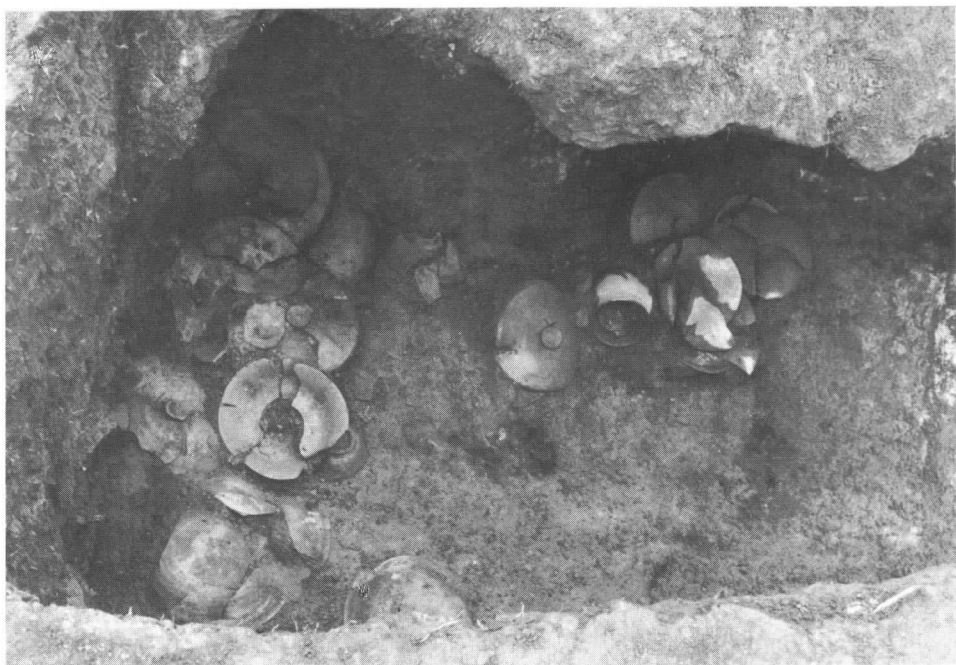
窯体内須恵器出土状態



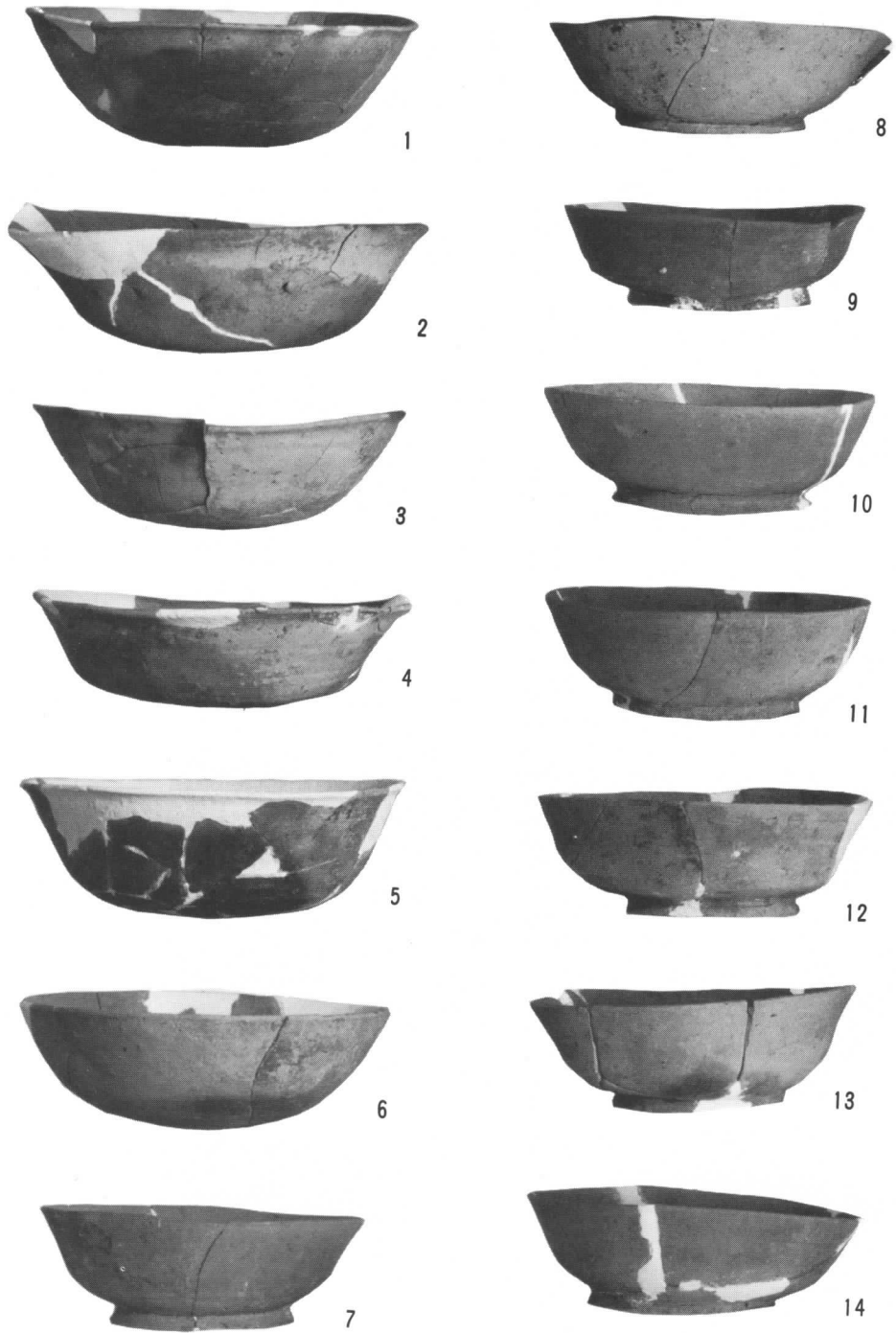
窯体内須恵器出土状態



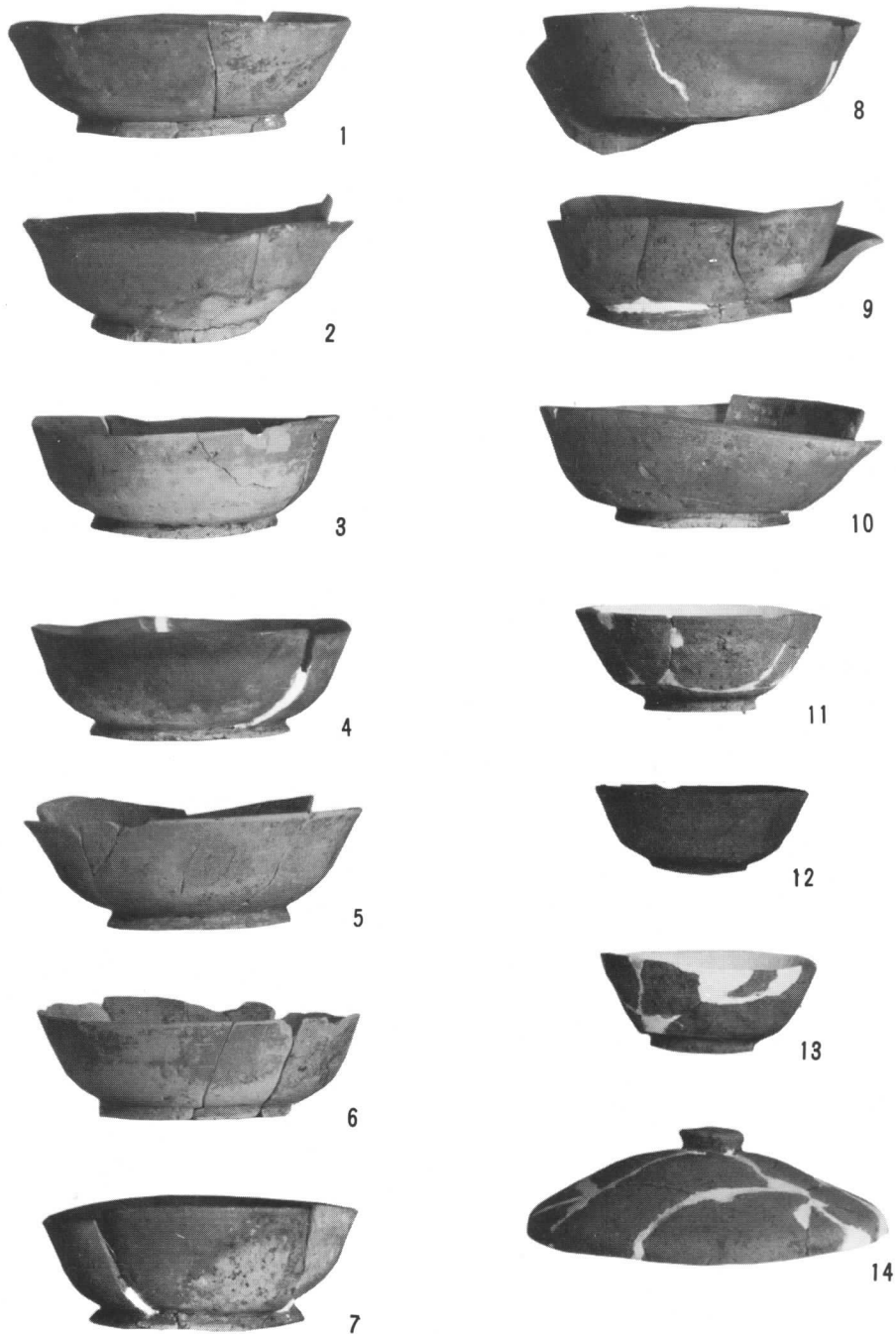
窯体内須恵器出土状態



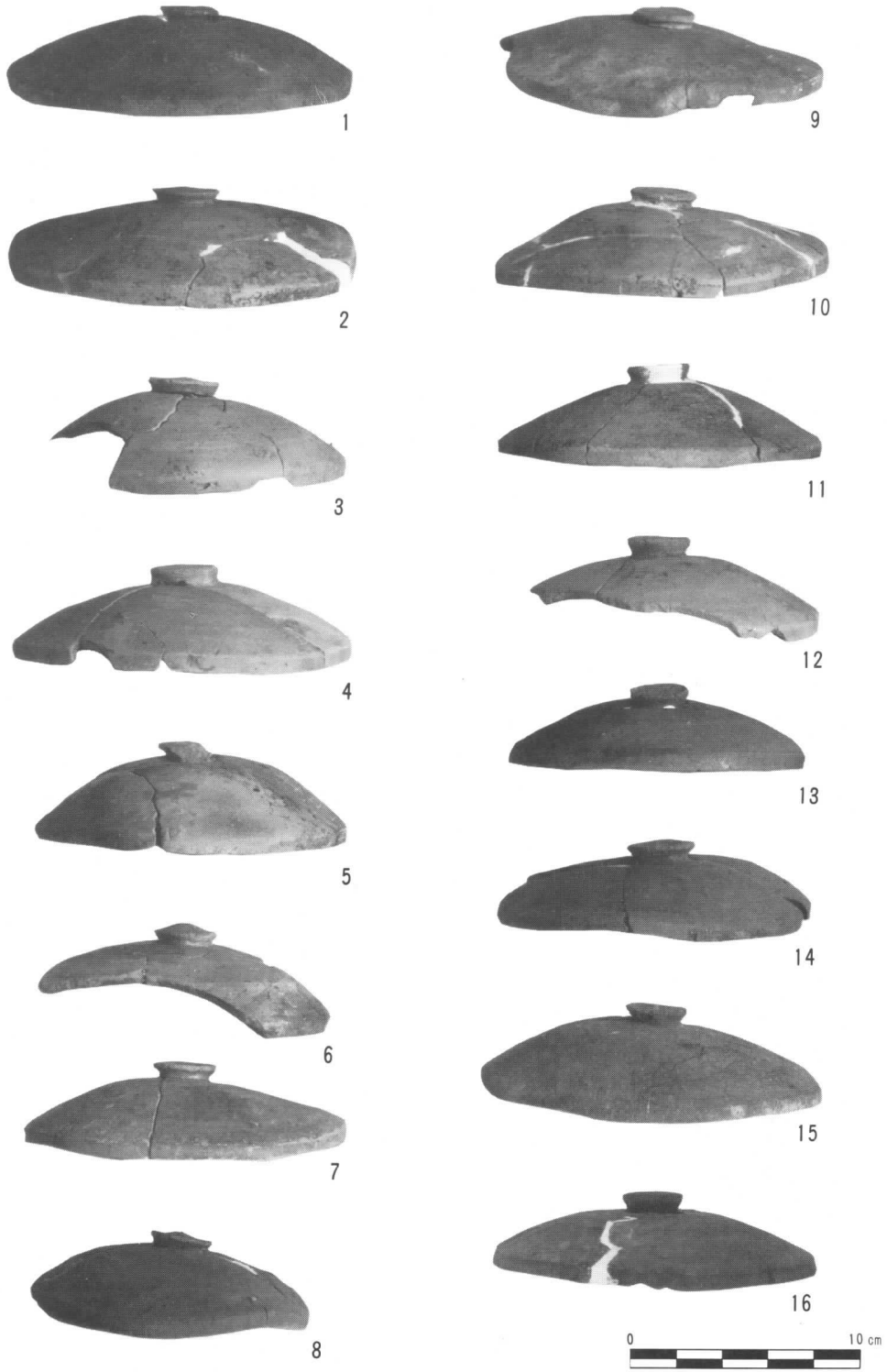
窯体内須恵器出土状態



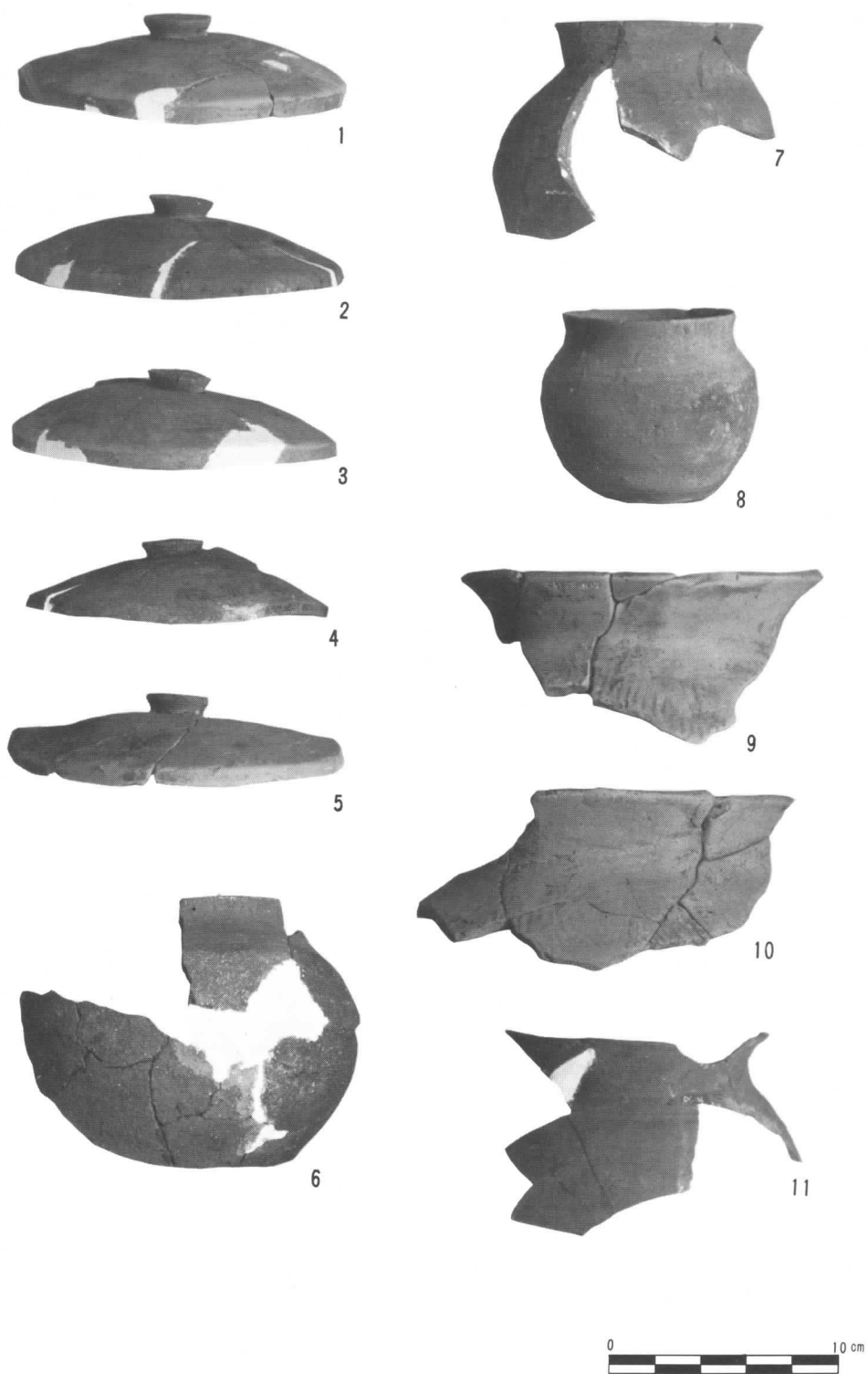
窯跡出土須恵器



窯跡出土須恵器



窯跡出土須恵器



窯跡出土須恵器



1



2



3



4



5



6

埋蔵文化財発掘調査報告書

— 笹山遺跡 —

昭和57年1月14日 印刷

昭和57年1月20日 発行

発行 長岡市教育委員会

印刷 (株) 第一印刷所

新潟市女池和合町1185番地